

第七講

脳は自意識に先行する

の第七講では、難しいが有益な話をします。有益ですが難しいです。あなたに難しい話を理解してもらうためにはどうすればよいのでしょうか？ それはきっと、筋道立ててゆっくり語りつくすことではなく、「つまり要点は何だ」ということを、あなたにぶっつけ続けることだと思います。そのようにこの講義は進めてまいります。あなたがここで体験される難しい話は、そのままあなたの役に立つことはありません。ですが、あなたに「ではこういうことでは？」という発想を起こさせるのに、決定的な役割を果たす可能性が十分にあります。

自分を磨くというとき、それが磨いた結果、光らないのでは何の意味もありません。本講義はそのような不毛をあなたにさせないつもりです。難しい話というのは、その難しさが大事なのではなくて、あなたに「じゃあどこをどう磨けばいいんだ」ということを導き出させるために有効です。それでは始めましょう。「脳は自意識に先行」します。



意識は現在を捉えていない

あなたの部屋のドアを蹴ったら、あなたは部屋の中で驚く、という話をしました。あなたはビックリとして、その後に「誰だよ」と、それが「誰かがドアを蹴った音だ」というのを認識します。でもあなたはその認識に到る前に、自動的にびっくりするし、自動的に音のしたほうを振り向くのでした。それは脳のはたらきだとずっと申し上げてきています。

このことだけでも、自意識の認識が「現在」という時間を捉えきれていないことを示しています。脳のはたらきに比べて遅れていますね。これは感覚的に驚かれることかもしれないのですが、たとえばあなたは今、この講義集のテキストを読んでいます。まさに「現在」、そうしているように思えるのですが、実は厳密に見ると、その認識は「現在」という時間を捉えられていないのでした。

われわれにはどうしても、自意識の全能性に対する思い込みがあります。自分が物事を認識している、これが全てだと思い込んでいます。ですが本当には、自分の心身に宿された機能はそれだけではないかもしれない。ここでは一度、その自意識の全能性について思い込みを捨ててみてください。実は現在という時間は、あなたの知らないところで粛々（しゅくしゅく）と流れている。その時間の流れを、脳は正しく眺めていて、一方で、あなたの自意識はその「過ぎ去った現在」という、よくよく見ればもう過去でしかないそれを眺めているのでした。だからドアをバンと蹴られると、あなたの「認識」は遅れるのですね。ドアがバンと蹴られたという「現在」が、もう過ぎ去った後にしか、あなたの自意識は「何があったか」ということは認識できない。単純に言えば、「認識」というそのことに時間が掛かってしまうのです。脳が全体的情報をそのまま受け取っていることに比べて、自意識はそれをパケタイズしてからしか認識できないので、ナマの情報を自意識用のフォーマットに変換する一時間が時間を食っているのでした。

あなたはこのことに驚かれるべきです。たとえばあなたは、「右手を上げてください」と言われて、右手を上げることができます。自意識から動作に移れるということです。自意識による「動作行為」ですね。ところが、背後で花瓶が割れてバツと振り向くときのように、あなたがその行為をする前からあなたの動作が

始まることがある。つまりあなたの身体を操作しているのは、あなたの自意識だけではないのです。あなたが「こう動かそう」とする以外にも、あなたの身体を動かす方法が実はあるのです。

"脳の人"と"自意識の人"という差分をお話ししてきました。あなたは自分の動作・振る舞いをスタートさせるのにも、「脳」からそれをスタートさせることができますし、「自意識」からそれをスタートさせることもできます。それを思うままにできるわけではないにせよ、少なくともその機能はあなたに具わっている。「脳」、つまり「現在」という時点から、「行為」という機能を媒介せずに、実はあなたは動作・振る舞いをスタートさせられる。一方で、「自意識」、つまり「認識」という時点から、「行為」という機能で、動作・振る舞いをスタートさせることもできる。

強引に例えるならばです。あなたがテレビの主電源をバチンと操作できる一方で、リモコンでプッと操作することもできる、という違いです。操作のルートが二種類あるのです。そして実はリモコンのほうがやや遅い。リモコンのボタンが押された「現在」に、本体が動作しているのではない。

例え話と、あまりにらめっこすることなく、このまま進んでください。

「無意識に」ということの誤解

このことを先にお話ししておく必要があります。あなたはひょっとすると、ここまでの話で「無意識に身体が動く」というような表現に、あなた自身の内側で取り替えられたかもしれません。ですが、申し訳ない、その表現はたいへん誤解をもたらすものなので、この講義においては取り下げていただくようお願いします。今お話ししているのは、いわゆる「無意識に」ということではありません。

一般的な「無意識に」ということについてお話ししましょう。それはいわゆる「クセ」のことです。たとえば爪を噛むようなクセ。初めは、誰だってそんなクセを持っていませんから、初めはそれを自意識で把握した「行為」としてやるのです。ですが、繰り返しているうちに「習慣」になります。「習慣」になると、それを自意識で「行為している」という感覚を忘れます。感覚を忘れるのですが、それはやはり自意識からの行為なのです。

あなたは「花瓶の割れた音がしたら振り向くクセがある」というのでしょうか。そんなことはないと思います。ですからそれはクセではなく、脳のはたらきによる動作です。

一般に「無意識にやっちゃった」というのは、ほとんどがその「クセ」のことを指します。それは自意識の習慣に過ぎないので、本講義でよろこばしく捉える現象ではありません。もちろん習慣・クセというのが悪いわけではない。たとえば正しい箸の持ち方だって、一種の習慣・クセであり、まず正しい持ち方を習慣づけることで、手はやがて箸の力学を覚えることができます。ただそれにしても、繰り返しの行為が習慣化して「無意識のクセ」になるのはここでの話と違いますからご注意ください。

コミュニケーションは「起こってから」わかる

人との関わりは「脳-脳の間」だと申し上げました。このことに改めて注目してください。脳というのは、時間軸上、「現在」という時点をとらえています。自意識はそれから遅れて「認識」という時点にいる。ですから、これも驚くべきことなのですが、全体的情報におけるコミュニケーション、「脳-脳の間

り」というのは、それが今まさに起こっている瞬間というのは、自意識では「わからない」のです。自意識の機能は、そうして起こったコミュニケーションに、ただ「追隨して」、コミュニケーションが「あった」ということを「確認」することしかできません。

脳と脳の関わり、全体的情報のコミュニケーション、脳に触れ合うよろこび、その営みというのは、自分でやろうとしてやるものではないのです。これは驚くべきことです。確かに言われてみれば、言葉も自意識もまだ持たない乳幼児だって他の人間とコミュニケートはするのですから、当たり前なのかもしれませんが、現代の大人の我々にとってはやはり驚くべきことだと思います。

脳には人や物事が「見える」という機能があり、その「見える」ものには「ついていく」ことができると申しあげました。その「見える」にしても「ついていく」にしても、脳と脳とでやる営み、時間軸上「現在」に起こる営みなので、自意識でやれることではありません。自意識は追隨・確認しかできないのですから、その追隨はもう時間軸上で遅れており、「ぴったりついていく」ということにはなっていません。

やっかいなことがあるわけです。我々がつい自意識の全能性を信じているところ、なにやら「肝心なことは全て"現在"に起こっている」ということであり、「自意識はその"現在"を捉えることができない」というのです。

自意識に対する全能性の思い込みを捨ててくださいとお願いしました。仮にあなたが自意識をオフにできたとしても、背後で花瓶が割れたら振り向きまします。振り向きましますし、その音が「何か割れた危険な音だ」というのは、自意識と関係なしに脳が受け取ってしまいます。

では、本当に、目の前に人間がいるという状況は、花瓶が割れたことに比較して、インパクトはゼロ、というようなことなのでしょう。そこには本当に「何もない」のか。一ミリも脳は「ワッ」としないのか。実はそういうことではないのです。目の前の人間の「姿」が「見える」ものであれば、自意識なしにでもあなたの「脳」はその「姿」に「ついていく」ということをする。何かしらの動作や振る舞いを起こしていくのです。

とりあえずこれは「講義」なので、あなたに仕組みをお話することしかできません。その実践や訓練はまたまったく別で、互いに心身を浴びせあうような何かの関係の中でそれをやるしかありません。ですがこれが講義でしかないというのは、当たり前のことですね。どうぞそのまま進んでください。



脳は「受け答え」をしない

新人の兵士が軍隊に入ると、まず「サー、イエッサー！」と大声で返事することを訓練させられます。少しでも声が小さいとやりなおしさせられるので、もう全力で声を出すしかありません。「お前らはクズだ！」と言われても、ただちに「サー、イエッサー！」。「腕立て百回！」と言われても「サー、イエッサー！」です。わずかな躊躇も許してもらえません。

これは何の訓練をしているのか、あなたは本当にはご存知のはずですが。自意識の機能を立ち上げさせない、自意識の機能をジャンプさせる訓練をしているのです。そうでないと、肝心なときに隊としての動きができません。「お前らはクズだ！」と言われたときに、その「脈絡」を「理解」などして、「はい、そう言えると思います」などという、「受け答え」をしていたのでは、いざというときの行動が遅れます。上官の声が、ただちに脳に飛び込むように、自意識で「受け答え」をしなくなるまで訓練を続けるのでした。

これは子供に対する熱心な教育塾でも同じことがあります。問題用紙を配り、教師が「よーい、はじめ！」という、子供は「やれやれ」という態度では解答を始めません。号令と共に、弾かれたように解答を書き始めます。空手の道場でも同じことをやるでしょう。「〇〇！」と名前を呼ぶと「押忍！」と返事を

します。返事をしないと、「貴様、返事はどうした！」と怒号が飛んできますから、もたもたしてはられません。

脳は「受け答え」の機能を持っていません。「受け答え」をするためには、「脈絡」の「理解」が必要で、それは自意識の機能にもとづいての行為でした。

あなたにはもちろん、受け答えをする機能もあり、その権利も持っています。受け答えをするのはあなたの自由といってもよいでしょう。けれども、もし「受け答えをしない」というやり方があるのを、ご存じなく、またその訓練をしたこともなければ、それが実際にできないというのであれば、あなたは自意識をジャンプして関わりを持つという方法を、単に修得せず取りこぼしてきていることになります。

自意識の全能性についての思い込みを捨ててくださいとお願いしてきました。あなたはここに示されたいくつかの例について、「受け答え」という行為が、本当に不可欠で重要だと思われるのでしょうか。きっとそんなことはないと思います。受け答えをしないことのほうが大事で、受け答えしないことでしか成立しない関係があるのというを、あなたは感じ取れもしますし、またどこかでうすうすご存知でもあると思います。

「受け答え」というのは何も上等なことでもなければ有効なことでもありません。受け答えの必要なシーンも勿論ありますが、そうでないシーンについては、それはきっと「自意識を挟み込まずにいられない」という意地っ張りな習慣です。あなたがどうするにせよ、確かなことはひとつ、「受け答え」はあなたから営みのよろこびを奪うだろうというのは、間違いのないことです。脳は受け答えはしないという、その仕組みをよくよくご覧になってください。



脳

は衝突しない、脈絡は衝突する

先日、社会的に、教育における体罰問題の議論が活発になりました。あなたはここでイメージしてください。体罰容認派と、体罰否定派が、論争をする会議室です。そこに営みのよろこびはあるでしょうか。まず無いと思います。そのようなシーンに、参加したいとも思えなければ、よほど悪趣味でないかぎり、そのシーンを見たいとも思われないはずです。

一方で、このようなシーンもイメージしてください。ある教師とある不良少年が至近距離でにらみ合っています。教師がバシッと、強烈に少年の頬を打ちました。それでも少年は教師を睨みつけるのをやめません。それどころか、「それで終わりか、先公」と静かに食って掛かります。睨み返す教師も負けていません。

「これで終わりだ、席につけ」と静かに厳しく言います。

教師と少年が、立場の違いこそあれ、お互いに一人の人間として「勝負」をしています。このようなシーンは、緊張感がありますが、きっとあなたはヒヤヒヤするものの、不快に思われるシーンではない。このシーンのあと、教師と少年はそれぞれにイライラしているのでしょうか。少年はきっと、「どうってことねえよ」と言うでしょうし、教師のほうも「どうってことない」と言うでしょう。

あなたは、この教師と少年のやりとりを見て、そこに営みによるこびが無い、とは断言されないでしょう。教師と少年が、何年後かに街中で出会ったら、かつての少年は「よお、クソ先公じゃねえか」と言うかもしれませんし、教師のほうも、「よう、悪ガキ」と言うかもしれません。少年はその後友人に、「古い、知り合いでね」と意味深に説明するかもしれませんし、教師のほうも、「教え子、でね」と意味深に言うかもしれません。あなたもご存知のように、本当の問題は頬を打ったかどうかということではないのです。人と人の関わりが残ったかどうかの問題です。もし人の関わりなどこの世に存在しないというなら、あなたは体罰の全てを単なる暴政だとして否定しなくてはなりません。

会議室の議論のほうは、ビンタこそ飛び交いませんが、きっとキリキリして、イヤな口調の口論が続きます。そして終わったあともお互いにイライラしているでしょう。表面上だけ握手して、内心ではいがみあっ

ているに決まっています。なぜそのようなことになるかという、脈絡を衝突させあうからでした。一方は教育理念からの脈絡を持ち出し、一方は基本的人権などの法理論の脈絡を持ち出してくる。これは衝突するに決まっているし、まず整合することもないので。よほど理論的にすすめば弁証法的に矛盾が解決される道筋が見えてくることもあるのですが、まずそんなことは期待できません。

一方、教師と不良少年のほうは、会議室とはまったく別のシーンです。一見、二人は衝突しているように見えます。けれども、別に教師は少年に「死ぬ」と思っているわけでもないし、少年も教師に「死ぬ」とは思っていない。会議室のほうは正直互いにそう思っています。下品にならないように我慢しているだけで。

教師と不良少年は、衝突しているように見えて、互いにつぶしあってはいません。互いに向き合って、どれだけヒリヒリと緊張感が高まっても、互いに一步も「引き下がらない」というだけです。お互い、周囲がどうこうとか、世の中のルールがどうこうとか、そんなことは気にしていません。教師から見て「コイツ」というのがあり、少年から見て「コイツ」というのがある。そして互いに、「コイツを相手に引き下がってたまるか」と向き合っています。ある意味では「存在」を認め合っているのです。

会議室のほうは、それぞれ自分の派閥が持ち込んだ脈絡のほうを優先されるべきだと信じていて、相手にそれを「理解」してもらおうとしています。理解してもらおうとするのですが、相手はまったく逆の立場から、同じように「理解」してもらおうとしている。それで初めは相互に協力的なのですが、いったん火がつくと、「脈絡のわからないバカどもめ」とお互いにつぶしあう気持ちになる。

脳は人の「存在」を受け止めます。そして「存在」というのは、それだけでは衝突はしないのです。脳は「存在」を受け止めるからこそ、その存在が「見える」ようになるのでもあります。また、睨まれても頬を打った教師、頬を打たれても睨み続けた少年、両方が「引き下がらない」ということを見てください。引き下がらないということは、お互いにオリてないということで、それは同時にお互いがお互いの用意したものに「ついていっている」ということでもあります。お互いに逃げておらず、かといってお互いに衝突したりつぶしあっているのでもなければ、それは「ついていっている」という状態しかありえません。

自意識の機能は「脈絡」と「理解」です。その「脈絡」というのは、自分の中で抱えている分には、正しく思えて有用に思えるのですが、向こうは向こうでまったく別のところから脈絡を持ってきますので、衝突します。こんなことは痴話喧嘩でもあります。「あいつが悪いんだからあいつから謝るべき」「わたしが悪いのかもしれないけどこういうときは男性から謝るべき」「それは男性が男として立ててもらっていたら話」「でもその男を立てるとかいうところからこの喧嘩は始まったのよね」と。こんなのはもう、衝突するか、オリるか、破局させるかのいずれかしかないので。こんなことに営みのよこびを見出す人はいません。

脳は存在を受け止め、衝突はしないということをよく見てください。犬でも猫でも野良はさかんに喧嘩をしますが、そのあとでイライラしている犬猫を見たことはないですね。彼らがイライラしないのは、別に脈絡を衝突させあったのではないからです。



コ

コミュニケーションは「行為」ではない

先ほど教師に頬を打たれた少年が、今度は隙を見て、教師に後ろから「カンチョー」をしたとしましょう。教師は「ぐわっ」ぐらいは言うはずです。教師は「貴様一」と言うとしても、そのころには少年はもう「ざまーみろ」と捨て台詞を残して走り去っている。このとき教師は少年を憎むか、あるいは軽蔑したりするでしょうか。「まったく困った奴だ」ぐらいには思うかもしれませんが、でも同時に、「何か、見どころのある奴だな」とも感じるかもしれません。

一方で、体罰問題で討議した両派の論客が、同じく隙を見て、後ろから「カンチョー」をする。「ぐ

わっ」となりますが、一体どんな感じになってしまうでしょう。きっと呆然として、「ありえない」「信じられない」と、純粋な軽蔑において見捨てるのではないのでしょうか。唾を吐き捨てたい気持ちになるかもしれない。

極端な例で、冗談みたいですが、わかりやすいのでこのままゆきます。コミュニケーションというのは、本質的に「行為」ではありません。もしコミュニケーションが「行為」であるなら、「カンチョー」はそれぞれに等しい効果を残すべきです。ですが実際にはそうはゆきません。

同じようなことが、実は日常的にもあります。あなたは冷たい人と握手するより、あたたかい人に「デコピン」をされるほうがはるかに心地よく思えるはずですが。握手とかデコピンとかいう、「行為」の内容は実は問題ではない。だからそれは、キスでもセックスでも同じなものでした。

あなたと、ある初対面の男性がいたとしましょう。あなたと彼が初めて会い、一対一で対峙する形になります。別に何でもない、ありふれた初対面です。でもそのときに、お互いが"脳の人"であったら、もうコミュニケーションは起こっています。お互いの「姿」が見えるので、お互いにそれについていきますし、「引き下がる」というような根性なしの理由も特にありません。

初対面の、いきなり冒頭でも、男性が女性のおでこにデコピンぐらいはできます。その「行為」は特に問題ではありません。それをしたからといって、何かよいコミュニケーションが得られるわけではない。ただ「確認」ができるだけです。デコピンぐらいはしてよい程度の、「人の関わり」、そのコミュニケーションが、今あったよね、ということの「確認」が。

少し講義から離れて、僕の個人的な体験からお話しすると、初対面の女性をデコピンで出迎えることぐらい、何も珍しいことではありません。なんでもないナンパのシーンでさえ、そんなことは普通にあります。いえ、「ありました」というべきでしょうか。講義の大タイトルは「現代と恋愛」ですから。

僕はよくこういう言い方をします。我々は、原子力発電所が吹っ飛んでも、それをなんだかんだ受け入れるのに、人が人にデコピンをすることも受け入れられないのかと。そんなさびしさの中で、愛だとか恋だとか、人を思いやるとか大切にするとかを、議論しなくてはならないのかと。そういうとき、僕は正直なところ、僕の性格によって、「まるでクソだな」と内心に思います。我々はしばしば、重要な国会議員の選挙でさえ投票を棄権するのに、たかがデコピンのひとつをとって、見逃せない重大事のように捉えます。

それで「心を開く」というようなことを大真面目に議論するような、滑稽な構図に参加してたまるか、と、僕はよく思います。講義に戻りましょう。あなたはそんな滑稽な構図に参加してはいけません。デコピンの問題は周辺国との領土問題よりも重大性はきわめて軽微です。

いわゆる「ビビビってきた」であるとか「一目ぼれ」であるとかを、本講義は肯定的に捉えません。認めない、と言ってしまってもよいでしょう。「ビビビ」と来ることは、本当にはきっとあるのだと思いますが、人々が自意識を膨張させた現代の中で、期待して得られるようなものではありません。あきらめましょう。そして少なくとも、デコピンひとつをする程度のことで、運命の赤い糸や超心理学的な「ビビビ」は必要ありません。デコピンのそのようなところまで含めて、コミュニケーションは「行為」によるものではないのです。「行為」によって得られることもなければ、「行為」によってつぶれてしまうことも、本当は無いのです。



意識は振る舞いに取り残される

さて話はよいよ難しくなってしまいます。ですがあなたを混乱させる話ではありません。あなた自身が"脳の人"であった場合、その感覚はどんな感じなのだろう？ という話です。"脳の人"であるあなたの

「姿」と「振る舞い」は、相手に「見える」として、あなた自身にはどのような感覚で捉えられるのか？
この話はどうしても難しくなるので、ひとまず一連の流れを順番に箇条書きにしてみます。

1. あなたの「振る舞い」は、自意識から切断されている
2. あなたの「振る舞い」は、あなた自身の脳にも見えている
3. あなたと相手は、あなたの「振る舞い」を、まったく同じに「確認」している
4. その「確認」と、やはり切断されて、「振る舞い」は次に続いている

このことを理解してもらうためにはきつと、あなたに思い切った「もし」という仮定を想像してもらう必要があります。そうでもしないと、どうしても、脳と自意識を区別して捉えることができないものですから。

あなたの名前が花子さんだったとします。ではあなたは、「花子さん」の身体を、SFのように「乗っ取った」ものだと思ってください。そういうSFがよくありますね。あなたはあなたの自意識を、花子さんの身体に侵入させ、その身体を乗っ取りました。今のあなたの身体は、花子さんのものを乗っ取って借りているだけです。

そして、その身体には、当然ですが、脳みそも入っています。それで、あなたが侵入した自意識として、気を張っている間は大丈夫なのですが、あなたが油断していると、あなたの身体を花子さんの脳が勝手に動かしてしまうことがあるのでした。花子さんの脳は、友人の姿を見ると、脳がワッとなるらしく、「おい！」と勝手に声を出して大きく手を振ってしまう。あなたはそれについて、「おいおい、元気だな花子さん」と呆れています。そのうちあなたは、この花子さんの脳がどのようなものなのか興味を湧いてきます。どうせ花子さんの身体を借りている間だけのことなので、いいでしょう。この脳はどういう挙動をするんだろう、と、面白がって、一度好きにやらせてみることにする。あなたは、花子さんの身体が脳からケラケラ笑ったりするのを見て、それを「へえ、こういうふうには笑うのか」と「確認」します。花子さんはとくに太郎君と仲良しで、よくこづきあったりしています。そのときあなたは、「仲よしだねえ」「わかるけど」と苦笑して二人を眺めているでしょう。あなたは自意識の立場から、「太郎君を」ではなく「花子さんと太郎君を」眺めているはずで、花子さんの脳と太郎君の脳がどう遊んでいるのか、それはわからないけれど、遊んでいることを「確認」はできる。

強引にでも例え話をするならばそのような具合になります。さて、もう一度さきほどの箇条書きに戻しましょう。あなたの振る舞いは自意識から切断されています。あなたが花子さんの脳に振る舞いをあずけたら確かにそうなります。そのとき花子さんの振る舞いは、花子さんの脳には「見えて」いるのでしょうか。あなたの自意識からはわかりませんが、脳は脳で何をやっているか自分で見えているはずで、太郎君の側にも自意識はあります。太郎君の自意識は、ちょうどあなたと同じように、花子さんの振る舞いを「確認」しているはずで、あなたとまったく同じタイミングで、あなたはまるで、太郎君の自意識と、友人であるかのように、花子さん面白いわよね、と肩をすくめあっているかもしれない。あなたがそうして花子さんの振る舞いを面白がって確認しているときも、花子さんの脳は次へ次へと振る舞いを進めています。

そろそろ、例え話から離れてもご理解いただけると思うのですが、つまりです、「あなたの脳は思っているほどあなたのものではない」のです。あなたは生まれながらに自意識はもっていなかったもので、自意識については「あなたのもの」と言ってよい。けれども、脳は生まれたときから勝手に身体についてきたはずで、だからそれは、実はいかにあなたのものではないのです。あなたの心臓が、あなたのものであるというには、あまりに勝手に機能してくれているように、あなたの脳という器官も、いかにあなたのものであるのです。

時間軸上、現在→認識と進むわけですから、脳は自意識に「先行」します。そして、その先行する「脳」というのが、いかにあなたのものであるということです。あなたの振る舞いを、先行して勝手に決めて作り出している装置が実はあるのです。それが脳なのでした。そして、その先行する「脳」は、相手に「見える」もので、相手に「ついてくる」ということをさせるのです。その先行機能が、コミュニケーション

を生み、人との関わりを作り出し、営みのよろこびを作り出しています。あなたの自意識はそれを確認するだけで、実はあなたの自意識は何も作り出してはいないのです。あなたの自意識は、振る舞いを生み出す装置ではなく、脳が生み出した振る舞いを「確認」するための"モニター装置"にすぎないのです。



先 行機能をどうするか

"脳の人"と"自意識の人"という言い方をしています。そして、もう察しをつけていらっしゃると思いますが、そのとおりで、"脳の人"と"自意識の人"は、時間軸上の立っている場所が違います。自意識は「現在」の時点に立っていないので、「確認」をする時点は誰でも同じです。が、"脳の人"は、その振る舞いのスタートを「現在」の時点におき、それを少し後の「認識」の時点で確認しています。一方で"自意識の人"は、「認識」の時点から、認識と同時に振る舞いをスタートさせています。数直線を作図すると、"脳の人"は-1の点から振る舞いがスタートしており、それを0の点で認識・確認しています。脳の振る舞いが先行している。"自意識の人"は、0の点に認識・確認と振る舞いのスタートが一緒くたになっています。そして人間の脳に何か「見える」というのは、その-1の点側のことなのです。

この脳の機能、自意識に対して-1のぶん先行できる機能を、単純に「先行機能」と呼ぶことにしましょう。先行機能は脳の機能なので、自意識では真似できませんし、自意識で「先行しろ」と命令することもできません。

ただ、あなたは自意識で振る舞いをコントロールはできるので、「自意識があるまで振る舞いを起こさないように」と、自意識からの命令を下すことはできます。「先行機能を受け付けないように」という命令だけはできるのでした。

つまり先行機能を「自制」できます。このような機能は状況によって必要です。たとえば仕事で取引先に行って、そこで自意識に確認させていない振る舞いを先行で出させるわけにはいきません。場合によっては、思わずバチンとやっちゃった、ということで、犯罪にさえなりかねません。

ですから、この先行機能の自制という能力も、やはり必要にはなります。必要というのは、それだけ便利ということなのです。

ただ、便利なのですが、その自制機能を使うかぎり、脳は振る舞いを禁止されていますので、脳が鍛えられるということが起こりません。先行機能が自制されている間は、脳はずっと自宅謹慎を命じられている状態だと捉えてください。これでは脳は鍛えられるわけがないし、いずれもう、出てこいと言っても今さら出てこなくなります。

あなたの脳が、今さら出てくるかどうかは置いておいて、あなたは一つのことを考えてください。「先行機能をどうするか」と。それを使う権利と使わない権利があったとしたら、あなたはどちらを選ぶのかを。

先行機能を使ったとき、それがまだ鍛えられていない場合、脳はいうほど賢くありません。経験がなさすぎるからです。振る舞いにバリエーションがないため、TPOが利かず、恥を搔くことになるでしょう。人に迷惑をかけることも十分あります。ただ、そうして恥を搔いたことは、脳は学習しますので、そのことによって鍛えられてゆきます。まるで子供のようなのですが、昔から謹慎処分で閉じ込められていたら、脳は当然未熟な子供のままなのではないでしょうか。それを鍛えるには、野原に子供を走り回らせるように、脳の先行機能を走り回らせるしかありません。そのうちに脳はどんどん賢くなります。そうそう自意識で自制しなくても、脳の先行だけでそこそこなんとかしてくれると信頼できる。もちろん自意識に先行しているので、どのような振る舞いをするのかはわからないのですが、「鍛えてあるから」という信頼があれば、思い切ってまかせられるでしょう。この、自分の脳の先行は「大丈夫だ」「ちゃんとやってくれる」という、鍛錬を

根拠にした上での信頼が、いわゆる「自信」です。自意識の判断力や価値観に自信があるわけではありません。自分の脳が先行、「やらかす」ことが、大丈夫だ、と信頼できるのが自信なのです。もちろん、いくら信頼するといっても、任せきるには、度量のいることでもあります。

その信頼と度量についての問題です。あなたは自分の振る舞いを、脳の先行に任せられるかどうか。あるいはいっそ、そうして「やらかす」ようなリスクは徹底的に排除するか。排除すれば安心ですが、営みのよろこびの一切は得られません。それでも、どうしてもプライドの高い人は、徹底して恥を搔かないほうを選ぶことがあります。そのようなことは少なくありません。特に加齢が進むほど、今さら恥を搔けない、という思いは強くなります。

あなたの脳が「今さら」、その先行のために出てきてくれるどうか、それは個人差があるのでわかりません。ですがそれを脳に今さらながら任せてみようということであれば、あなたにはあなたの脳の振る舞いを許す度量が必要になるはずで、また友人同士、脳の振る舞い（とその未熟）を許しあえる度量の関係も必要になるでしょう。

第

七講は、これで主題部分はおしまいです。この後に付録として、「自意識とは何か」ということ、一般論のようなものを書き足しておきます。本講義の趣旨にはあまり重ならないのですが、やはり隙間のない理解をされたいという方にとっては必要な部分になると思います。こちらはまったく難しい話ではないので、是非合わせてお読みください。

「現代と恋愛」という大タイトルの中で、迷いましたが、この第七講に、「脳は自意識に先行する」を選んでお話ししました。迷ったのは、この内容は厳密にはもう「未来と恋愛」に差し掛かるというべきだからです。現代は自意識の時代だと本講義は指摘しているわけなので、でも、「とはいえ」という気持ちで、この講義内容を差し挟みました。いかに"講義"だからといって、未来の方向を指し示さなくていい、というようには、僕には信じきれませんでした。それでいささか、講義というよりは講演というほうへ踏み出していますが、ご容赦ください。

この第七講、「脳は自意識に先行する」は、どうしても主題として難しくなります。突き詰めるところ、自分で「確認」する前に、脳にはもう何かが「見えて」いて、また自分で「確認」する前に、「ついていく」とか動くとか振る舞いを起こすことが可能だということです。それはにわかにはわかりやすい話ではない。特に、自意識の万能性、自意識で「確認」できることが全てだと、いつの間にか思い込んでいたのだとしたら。

賢明な方は、すでに手元にメモ書きを残されているかもしれません。ある作図の入った……その作図の中で、「脳」と「自意識」が分離されて書かれていれば、ひとつの正解です。そして脳は脳とコミュニケーションしており、自意識はそれを一方的に確認しているのみだ、という矢印が書かれていれば、それも当たりです。脳と自意識の立つ時点、「現在」と「認識」を数直線上に書かれた方は、「認識」の点であるゼロ点から、「現在」の点である-1の点への、わずかな距離が、実はどれだけ重要で犯しがたいものであるかを感じ取られると思います。

では、ここでひとまず、第七講のしめくりとします。お疲れ様でした。続いて第八講へどうぞ。この講義より難解な話はもう出てきませんので、その点をご安心くださって、どうぞ進んでください。

<以下付録>

「脈絡」は、実は数学

数学というと、 $y=ax+b$ と、すぐ黒板の授業を思い出される方がいらっしゃるかもしれませんが、実は数学といっても、物理や化学と同じように、この世界の实情から切り離された学問ではないのです。あなたにひとつ問題を出します。あなたの前に、五体満足の人々がたくさんいます。足の数を数えると 20 本でした。人数は何人でしょうか？ 答えは当たり前ですが 10 人です。これを数式で書くと $y=2x$ となるだけです。足 = $2 \times$ 人数ですね。仮に事故などで両足をなくされた方がその中に 1 名いらっしゃるなら、 $y=2x-2$ となります。動物によっては足の数が 2 本とは限りませんし、足を持たない動物だっていますから、それらのことを一般化すると、 $y=ax+b$ と書かざるを得ない。そういうふうに数学はできています。

あなたが駅の改札口にいて、ポケットをもぞもぞしています。右ポケットに入れたはずの切符が無いのです。次にどこを探りますか。当然左ポケットを探りますね。つづいて、「あ、ハンカチを出したとき、あやまってカバンに」ということに思い至り、カバンの中を探ります。そしてようやく「あった」となる。

もしあなたに、脈絡という機能がまったくなかったらどうでしょうか？ あなたは友人に電話を掛けて、「あなたの家にわたしの切符置いてなかった？」 「あなたわたしの家に来たことないじゃない」というような、荒唐無稽な話になりかねません。なくした切符が友人の家にあるわけがないですね。なぜありえないかといえば、「脈絡上ありえない」とあなたは言うはずですが。まず友人の家に行ったこともなければ、そもそも切符を入手したのは券売機に触れたあとで、さらには、その切符を使ってしか自分は駅の構内に入れなかったわけで、電車に乗って移動したということは、必ずその道中のどこかで切符をなくしているはずなのです。

これは数学的に、「切符の移動した座標をもっとも確率の高い順に述べよ」というような問題を解いているのに等しいのでした。右ポケットがだめなら左ポケット、それでもだめならジャケットのポケット、そうでないならカバンや財布。でも少なくとも自分の入った改札口から現在の立ち位置までのどこかに座標は限定されます。

脈絡の機能とは、実はこのような数学の機能なのでした。部屋の窓を開けると風が入ってきます。ということは、必ず部屋のどこかから風が出ていっているということ、あなたはご存知のはずです。難しく言うと、部屋の容積は一定で、部屋の気圧も一定に保たれているとすれば、流入した分の空気はどこかへ出て行かないと脈絡が合わないからです。これを数式で書くと、たとえば $V(\text{const})=V(\text{const})+v(\text{in})-v(\text{out})$ というようになり、この数式を解くと $v(\text{in})=v(\text{out})$ が導かれるということになるのでした。

数学とは何に必要かといえば、この場合、あなたが「別にわたしの部屋に限らずね」と一般化して言うために必要な学問です。誰の部屋だって容積は $V(\text{const})$ と書いてしまっても一般性を失いませんから。あなたの家の台所に換気扇があると思いますが、その羽を仮に逆回転させたとしても、換気される空気の量は同じです。 $v(\text{in})=v(\text{out})$ ですから。ただ、肝心の台所の煙が、集中的に排気されるわけではないので、逆回転では実際困りものですが。



意識は五歳以降に成熟する

$x \times y$ という積の結果が必ずマイナスになる、とします。このとき x の値はプラスでした。では y の値はプラスでしょうかマイナスでしょうか。当然マイナスですね。逆に x がマイナスのときは、 y はプラスになりますね。例外があるとすれば、 x や y がゼロのときだけです。ゼロのときは、掛け算をすると、プラスもマイナスもよくわからなくなります。

こんな数式には何の意味もないように思えるのですが、これは例えば、交差点の信号などのことなのです。青信号は「進んでよし」なのですが、それがなぜ「進んでよし」なのかというと、交差側が赤信号だからです。逆に、赤信号が「進んではいけない」なのは、交差側が青信号だからですね。これが「脈絡」です。もし子供に「赤信号は進んじゃだめ」というのを、脈絡と共に教えたいというときは、「こちらが赤ならあちらは必ず青なの」と教えなくてははいけません。

水道の元栓を締めてあれば、いくら蛇口を開いても水は出てきませんね。これも脈絡です。水量を元栓 \times 蛇口と表せば、元栓がゼロなら蛇口をいくら大にしてもゼロです。これは当たり前に見えるのですが、そうではないのです。実際過去には、「蛇口を買って壁につけたけど水が出ないぞ！」というクレームがあったという逸話が残っています。

子供にはいかにもありそうなことだと感じませんか。「この蛇口を取り外して二階につけたら、二階からお水が出るの？」と。医学的なレポートではありませんが、およそ五歳未満の子供は、まだ脈絡の機能を成熟させておらず、ただ脳によって「この蛇口というものをひねると水が出る」としか知っていません。僕も子供のころの記憶が残っています。ビデオテープの「巻き戻し」というのが不思議で、「これってずっと巻き戻したら、ザーッと昔のテレビも観れるの？」と両親に聞いたことがあります。まだ脈絡の機能が弱いとそんな具合です。

ターベル・コースという手品の百科事典に、このことが書いてあります。手品というのは、5歳から105歳までの人間が楽しめる芸術であると。やんわり書いてあるのですが、それは五歳未満の子供には手品がわからないということでもあるのでした。実際僕も、ある機会に幼稚園で手品をさせられたことがあるのですが、先生たちが夢中になるばかりで、肝心の園児たちには何のことやらポカーンとわかりません。コインを手の中に握った、それは手の中にある「はず」という、その脈絡がわからないのです。ですからコインが消えてなくなったとしてもまったく驚きません。

なるほど子供だからなあ、という、面白い話なのですが、われわれ大人も、じっくり見ると大したことはありません。あるとき銭湯で、もう中年のおじさんでしたが、同じく連れ合いの中年のおじさんと、「この電気風呂の湯って、洗面器に汲んだら、それを浴びてもビビビってなるのかよ？」「ええっ、怖いこといなよ。そうなのか？」と大真面目に議論していました。その後、おそるおそる、洗面器に汲んだ湯に手を突っ込んでいましたが……



意識の仕事

「脈絡」が難しい話になると、たとえばこんな話になります。未成年者と金銭貸借の契約をしても、それは後に取り消しができます。自由契約の作り出す法的効力より民法に定められた未成年者の行為能力制限が優先されるからです。ですが未成年者が成年であると偽っていたら今度は同じ民法上の「制限行為能力者の

詐術」というのに該当し、取り消しが利かなくなります。未成年が親を連帯保証人にする架空の書類を作ったとして、そのようなものも無効ですが、それを受けて親が「十円だけ払ってやる」としたら、これは「無権代理行動の追認」になってしまい、その架空だった種類も追認されて有効になります。

こうして複雑化した脈絡は、素人にはもう追跡できなくなりますので、専門家が必要になります。

あるいは、誰かが大怪我をしたとき、それが「大怪我だ」「たくさん血が出ていて危ない」ということは、誰にでもわかるのですが、だからといってどうしたらよいかは素人にはわかりません。われわれだって、「心臓が全身に血液を送り出して人体は生命を守っている」という程度の機構脈絡は知っていますが、それ以上のことは知りません。だからどうしたらよいかわからない。医師は専門的にこの機構脈絡を知り抜いている職業です。医師はただちに、「ショック状態があるから、麻酔して、それからクロスマッチと、輸血の準備、あと抗生剤と昇圧剤も準備して、まず血管を縫合して止血し、開放部骨折を洗浄してインプラント修復します、鎖骨の骨折はひとまず保存療法とします。外傷は大きいですが幸い意識もあり脳波の異常や内臓破裂は見当たりません」というような治療方針を立てます。全て、人体がどのように生命を保っているか、それが今どのように損傷しているか、そしてどのようになら治癒しうるかという、脈絡を頭に叩き込んでいるからこそできることです。

ぐっと簡単な例に引き下げてみましょう。あなたの部屋にスピーカーがあり、右のスピーカーから音が出なくなりました。あなたはスピーカーを買い換えるべきでしょうか。きっとその前に、左右のスピーカーのケーブルを入れ替えてみるべきです。それで今度は左のスピーカーから音が出なくなった。それなら壊れているのはスピーカーではなくケーブルです。「脈絡」ですね。あなたは無駄な出費をせずに済みました。

自意識というのはそのような「脈絡」の仕事をしているのでした。また勉強というのも、そういう脈絡の機能を鍛えるために本来するものです。

勉 強は自意識の機能を合理化する

あなたのPCをパワーアップさせてあげます、といて、僕があなたのPCを改造し、「巨大なサイズで」「高熱を放ち」「ブオオオンと轟音のする」PCに仕立てたなら、あなたはきっと怒るでしょう。PCのパワーアップとはそういうことではないはず。むしろ「小さく」「静かに」「必要最小限の消費エネルギーで済む」PCこそが、パワーアップしたものだといえます。

あなたは勉強をしなくてはなりません。社会的な立場のためにもそうですし、あなた自身のためにも必ずそれは必要になります。それは自意識の機能を強化し、鍛錬するためです。自意識の強化と鍛錬は、PCと同じく「合理化」に向かいます。自意識の、不必要な大きさを縮小し、動作に消耗するエネルギーを削減し、ドタバタ音を立てないようにする、そのためにするのが勉強です。そのために勉強を「みっちり」します。

「この問題を解きなさい」と問題を与えたとして、ぎゃあぎゃあ騒ぐのは勉強をみっちりしてきた側ではなく、できていない側です。騒ぐどころか、発熱にやられてドタバタ逃げ出したりさえするはず。騒ぐどころか、発熱にやられてドタバタ逃げ出したりさえするはず。騒ぐどころか、発熱にやられてドタバタ逃げ出したりさえするはずです。

言い方は悪いですが、「感情的なおばさん」をイメージしてみてください。何事についても「んまあ」と大げさなおばさんです。あなたはそのおばさんの運転する車の助手席に乗るのが少し怖いはず。それはそのおばさんが自意識の鍛錬にいまち優れていないからだと言えます。三車線が二車線に狭まり、後ろの車がウインカーを出して煽るところ、左に工事の看板が出ていて、カーナビが「まもなくバイパスがあります」と警告します。こうなるとおばさんは与えられるパケット情報の処理ができず、ハンドルにしがみついて必死になりますが、もう頭が沸いてしまって判断能力を失っています。車の運転なのですから、脳の機能も要るのですが、自意識の脈絡の機能も要るのです。もし脈絡の機能が要らないならば運転免許に学科試験は必要ありません。助手席にいたあなたはたまたま、申し訳ないですが、「高性能な運転手さんに取り

替えたい」と思われるでしょう。あなたの身が危険なのではないでしょうか。

人間の生活は、そのように脈絡の機能も駆使できなければ、滑らかに豊かに生きていけません。そのため勉強を課されるわけですし、あなたもできる限り、それに「みっちり」応えていくべきです。脳を鍛えることとは、まったく別次元で。



意識の握力

勉強を「みっちり」というのは、自意識の機能の、いわば「握力」を鍛えるためです。PCでもそうですが、高性能でも機能が不安定だったり、耐久性が虚弱だったりすることがあります。家庭用でひっそり趣味に使う分にはそれでよくても、たとえば医療現場であるとか、戦場で使うようなコンピューターだとそれでは困ります。雨に濡れても風に吹かれても、土ぼりの中でも、やはり高性能でありつづけるコンピューターでないと、危なっかしくて実用に耐えません。

自意識の機能が「ストレス下でも失われない」という頑強さが必要です。本来は頭のよいはずの人間が、運転をしていて、運転自体は上手なのに、後ろからクラクションで煽られたら、とたんに慌てて動作が不安定になるということがあります。これは性能は足りているのですが頑強さが足りていないのです。そのためには勉強は「みっちり」やられる必要があります。後ろから少々蹴飛ばされても脈絡の機能が狂わない、というような鍛えられ方が要る。

このようなことがあるので、しばしば、頭の生まれつき良すぎる人が、実用に耐えない具合に育ってしまうことがあります。彼は「みっちり」やらなくても東京大学に入れてしまうのです。誰も文句のつけようがないので、後ろから蹴飛ばされることがありません。けれども、それはたとえば恋愛などになれば、プレッシャーやストレスが掛かりますから、話が変わってきてしまいます。彼の数学的頭脳から言えば、自分が彼女に愛されていないということの脈絡は、理解に容易なはずなのですが、その理解が受け止めきれず、ストーカーになったりします。

ある大学の教授が、自分が感電事故に遭いながら、その物理学の知識で自らを救ったという逸話があります。トラクターで作業をしていたのですが、あやまって電柱を倒してしまいました。電柱が倒れてきて、電線を浴びて感電してしまいます。

それを助けにきた若者に向けて、「片足でトラクターに乗ってはいけない！」と、教授は制止しました。「両足でジャンプしてトラクターに乗るんだ。そうでないと、君の片足はアースになって、全身に通電してしまう」と。トラクターはタイヤで地面から浮いているため、地面とは絶縁で保たれています。ですからトラクター上は今高電圧なのですが、今電流が大量に流れてしまっているのではないのです。そこに若者が片足なり片手なりをつけたら、彼自身が電線になってしまい、電流の流れる流路になってしまう。一瞬で即死するでしょう。それで若者は両足でジャンプしてトラクターに乗り、トラクターを後退させて、事なきを得ました。

全身が高電圧に痺れていてもなお、「電気は電気だ」と、物理学の脈絡が失われない。ここまでくるとまさに「筋金入り」です。勉強をやるなら「みっちり」やらねばならないというのは、この筋金を入れるためなのです。



意識は「陶醉」する

勉強を「みっちり」やると、いよいよ表面的な楽しさはなくなってきます。妙な「ハイ」の状態にはなりますが、いわゆる「楽しい」という状態ではなくなってくる。この、「勉強は楽しくない」ということは、意外に大事なことなので、覚えておいていただくとよいと思います。後の講義にまた出てくる話ですが、先に少しお話ししておきましょう。

自意識はパケット情報を処理する装置だとお話ししました。それがみっちりした勉強となると、さんざん嘔まないし飲み込めないし消化もできないというようなものになるので、逆に自意識のダイエットによいのですが、そうではないパケット情報、とにかく自分に流し込めるような、ジュースのようなパケット情報もあります。

自意識は、そういった甘露のパケット情報を流し込まれると、「陶醉」と呼ばれる状態になります。一種の楽しさで、これは麻薬的に人を中毒にさせるものです。それは甘露のジュースなので、自意識は肥え太っていくのですが、それに起こる「陶醉」に中毒性があるので、やめることができなくなります。

「陶醉」は、めまぐるしい映像や、言葉や数字などの記号、意味のある音などを、次々に流し込むことで起こります。自意識をわかりやすく"こすりあげる"ふうにして、陶醉が起こると捉えて間違いありません。たとえばパチンコ遊びなどがその代表です。めまぐるしい映像、動き回る球、激しい音、明滅するランプなどが、人を陶醉させます。そこに金銭的な得失も加わって、自意識をひりひりこすりあげます。パチンコは無論、負ける人のほうが多いので産業として成り立つわけですが、負ける人でもなぜ遊びに行くかという、そこに起こる「陶醉」が楽しく、中毒性があるからです。

「陶醉」だからといって、何もかも否定する必要はありません。陶醉がまるで無いというのも少し寂しい気がしますが、あえて「陶醉」の仕掛けの中で自意識を振り回されないようにするという、自意識の握力の鍛え方もありますから。とはいえ、その陶醉中毒にすっかり自分の機能を持っていかれるだけ、というのは話が違います。

パチンコ遊びに限らず、「陶醉」を遊ぶ場合には、きっとそれに対極にある何かで、バランスが取られていなくてはならないでしょう。パチンコなどの遊びはきっと、ハマらないではいまいち面白くないはずです。そうしてハマっていても、一方で何かが強烈にバランスを取っていてこそ、それは汚染的でない遊びになりうると思います。あなたもきっと、車の運転が上手でないお婆さんが、パチンコにハマりだしたら、それはさすがに制止したい気持ちに駆られると思います。



「自意識過剰」とは

一般によく「自意識過剰」と言います。「みんながわたしに嫉妬している」というのは自意識過剰ですし、「みんながわたしを嫌っている」というのも自意識過剰です。過ぎた増長も自意識過剰なら過ぎた卑下も自意識過剰です。正解は大半の場合、「周囲はそれほど注目していない」です。仮に一瞬注目したとしても、半日も経たず忘れます。自分がそうするように、他人も同じようにそうするのです。

自意識過剰というのは、空間における「自分」の存在感を過大に見積もることを言うのですが、それは当たり前だとしても、問題はなぜそのような誤った見積もりをしてしまうかです。それはやはり自意識の肥え太りに原因があるのでした。

自意識の鍛錬は、自意識を合理的に高機能にし、縮小・静音化することでしたが、その逆に「甘やかし」は、ジュースをさんざん与えて肥え太らせることです。<<肥え太った自意識は、中毒の習慣によって、ほとんど瞬間的に、自分が「陶酔」できる筋道を見つけます>>。「みんながわたしに嫉妬している」という空想は、自意識を陶酔させますし、「みんながわたしを嫌っている」という空想も、自意識をマイナスに陶酔させるのです。陶酔中毒を起こしている自意識は、まったく瞬間的にこの発想を掴み取って陶酔します。肥え太った自意識は、もう脈絡を掴んでいる握力がゼロなので、もう脈絡とは関係なしに、ただ陶酔が深く起こるほうへばかり行きます。中毒が習慣になった自意識は、もうそうして陶酔している状態のほうに慣れ親しんでいるので、今さらその状態から離れがたいのです。ヒートアップしていない自意識という状態が、もう感覚的にわからなくなっています。

もちろんこのことは、「脳」の側を機能させるのにも、致命的な障害となります。ヒートアップした自意識が、脳の先行機能を認めたりするわけがありません。自意識過剰の正体は、このように自意識がむしろ「みっちり」鍛えられていないことによるので、根本的な改善は、何かをみっちり勉強するのみであるとか、「まったく陶酔できない」時間を課すしかないように思われます。



作

品は体験を生み出す

ここまでIT端末を代表としてパケット情報を槍玉に挙げてきましたが、「作品」についてはいささが話が変わってきます。今や映画や音楽は十分にダウンロードから得られる時代になりました。それらもパケット情報なのか、ということになると話がややこしくなります。それについての結論は、「作品」については、あなたを陶酔に遊ばせる意図のものでないなら、どんどん触れてゆけばよい、ということになります。

なぜかという、芸術の技法でよく作られた作品というのは、あなたに訴えかける表現の仕組みが違うからです。このことを精密に話すと、おそろしく長く、また難しい話になってしまうのですが、端的に言うならば、それらの作品はあなたにパケット情報ではなくて「体験」を与えようとしています。あなたに吸い上げやすい世界の情報を与えるものではありません。ややこしく描かれたその表現の隙間から、あなた自身の想像力が、ふと世界を自ら作り出してしまふ、そういう技術が凝らされているのです。

実は芸術作品の体験というのは、あなた自身がそれに呼応することによって、あなた自身で作り出しているのです。だから、たとえばピカソの絵などは典型的ですが、芸術作品の表現は、奇妙に脈絡を外してきます。これはいくら脈絡で追っても理解できないのですが、まったく脈絡が無いだけの無意味に作られているわけではない。ピカソは脳でその絵を描いているので、あなたもひよっとすれば、その絵に何か「見えて」しまうのです。それに「ついていく」ということが起こる場合がある。それが芸術作品の体験です。

さきほど、「勉強は楽しくない」ということを申し上げました。それと同様に、美術館や文学作品を読むことやクラシック音楽を聴くことは、パチンコ遊びのように楽しくはありません。「陶酔」に慣れた自意識では、とにかく面白くない、ということばかりが先に立つでしょう。それは確かに、ジュースの流し込みのような陶酔を与えてはくれないのです。

ただ、みっちりとした勉強と同じように、何か「ハイ」になるところはあり、また、「みっちり」ということにあるように、身体にじっとり汗を書き始めます。重厚な文学作品を読み終わった場合、それに呼応しきるように読んだとしたら、あなたはまったく「クタクタ」になっているでしょう。それはあなたの脳がはげしい仕事をしたのでクタクタになっているのです。

映画などを代表に、作品というのは、けっきょく娯楽と芸術の境目を明確に示すことはできません。混在していますし、折衷しています。ただ本当に良い作品であれば、あなたをクタクタにさせたあげく、あなた

からその批評やコメントをしようとする気力を奪い去るでしょう。それは脳機能が活性化して、自意識の機能が低下している状態を示しています。

クラシック音楽の演奏があったとき、その後にしきりに「ここが素晴らしかった」とあなたに批評させるならば、それは実はたいしたものではなく、「ホールを出てもまともに歩けなかった」「コメントどころか、とにかくしばらく放っておいてくれとしか思わなかった」というほうが、より深い芸術体験です。その強烈な体験性は、たとえば失恋直後の人間に似ています。「まともに歩けなかった」「コメントどころか、とにかくしばらく放っておいてくれとしか思わなかった」、確かに失恋直後の人間はそのような状態になります。芸術体験というのは、そうして単なるパケット情報の受け取りではなく、はっきりとした体験を人間に与えます。ですから、メディア（媒体）が何であっても、優れた芸術作品に出会えることは、まったく別のことだと捉えてよいのです。

以 上で第七講を終わります。付録を含めるとずいぶん長くなってしまいました。けれども残すところあとわずか二つです。どうせなら最後まで駆け抜けてから、一休みにされるほうが、その一休みもあなたに官能を与えるでしょう。本講義は、ひとまず駆け抜けてから、またもう一度、次はのんびり読み進められることを推奨します。

第八講

陶酔がよろこびに取って代わる

あ

あなたは脳に起こる営みと自意識に起こる営みとを、はっきり区別されるべきです。現代と恋愛という大タイトルでお話していますが、現代が自意識の発達する時代であり、脳が弱くなる時代であるにも関わらず、あなたは脳の営みとしての恋愛に到達するべきだというのが、この講義のつまるどころの結論です。脳に起こる営みにしか、営みのよろこびは無いのでしたね。それを、よろこびのないまま形式だけ恋愛を営んでも不毛なことです。「リア充」の要件をいくら整えても、そこに営みのよろこびが無いのでは、何が充実しているのか、わけがわかりません。

脳に起こる営みと、自意識に起こる営みとを、あなた自身で峻別するには、あなたはその両方をよく知らなくてはなりません。そこで、脳に起こる営みはどのようなかを、先ほどの講義でお話しました。今回はその裏側、自意識に起こる営みの"本性"はどのようなのかについてお話しします。

ところで、このような「現代」の仕組みは、いつから、何を端緒にして、始まったものなのでしょうか。明確な断言は誰にもできないと思います。ですが、本講義では、それが1995年ごろに始まったと、指摘する予定です。現代を実際に生きる我々にとって、過去のことは関係がありませんが、それでも「現代と恋愛」を把握するのに、過去からの変遷も踏まえた構造的な理解は、あるていど必要だと思われます。そのことは、次回の講義に話され、講義全体の締めくくりとなるでしょう。今回の講義はその次回の講義まで繋がっています。

それでは講義を始めましょう。



意識の正当な営み

前回の講義でも、自意識の「仕事」についてお話ししています。自意識には正当な仕事があり、自意識には自意識の、正当な営みがあります。それは人間独自の営みであり、他の動物にはない営みです。また、典型的には、ロボットで代用が利くようなものや、IT革命・インターネット通信で利便が増すようなものは、自意識の営みだと言えます。代表的なものは役所の手続きです。これは本当には、役所のホームページで全て済ませられるほうが、本当は都合がよい。新聞を読むというようなことも、他の動物には無い、人間独自の営みです。新聞などは、典型的に情報「数」を必要として読むものです。ですからこれは、オンラインのウェブニュースに取って代わったほうが利便が増すところがあり、事実としてその移行は始まっています。

「この薬にはどのような薬効があるか」であるとか、「サラダ油は大きじ一杯で何カロリーあるか」であるとか、そういったことはパケット情報なので、IT革命が正当に利便を増してくれました。今、日本の端から端へでも、電車で行くにはどうすればいいか、どれだけの時間と電車賃が掛かるのかを、オンラインITが即座に回答してくれます。とはいえもちろん、パケット情報の複雑化したものには、まだまだIT化の実現していないものがありますから、それについては専門家が必要なのでした。法律の条文はインターネットで即座に調べられますが、「このような事件について過去の判例はあるだろうか？」というようなことは、まだ専門家の糸口なしには調べることができません。専門家には専門家のITデータベースがあるかもしれ

ませんが、それを利用するのにも、まだまだ専門家の専門的な知識が必要な段階です。まだスマートホンに向かって「法律相談」ができるところまではIT技術は進化しきっていない。

いわば、「未来には、スマートホンに相談すれば、それだけで片付くだろう」というような用事の全ては、自意識の営みだと言えるでしょう。「ドライ・マティーニのレシピは？」と聞くだけで、スマートホンが即座に回答してくれるというようなところに、すでにIT技術は到達しています。

年賀状などは、ビジネス上の礼節として保存されているものを除けば、現在はほとんどオンタイムでの「あけおめ」メールに取って代わられました。このあたりまでは、自意識の営みだと見ていいでしょう。微妙なところですが……これが「手書きのラブレター」になってくると、そろそろ話は変わってきます。手書きのラブレターをもらったとき、その文言をテキストデータに打ち込みなおし、原本は捨ててしまっているとは、人はなかなか感じません。精密にスキャンしてデータを保存すればよいかというと、なかなかそうも割り切れない。それは、手書きのラブレターには手書きの味……というより、その便箋に直接手で触れることができる、そのページをめくってゆくことができる、ということが重要です。物品の直接の感触を受け取るのは脳ですから。脳の立場になって捉えれば、脳はその封筒と便箋と綴られたインクと文字とを、分解して受け取っていません。全体的情報としてその「ラブレター」を受け取っています。これを失うのが惜しいので、人はそれをデータ化して保存すればよいとはなかなか割り切れないのでした。それは割り切るも何も、脳の立場になって考えれば、データ化したそれと手で触れられる便箋とはまったくの別物です。デジタルデータは劣化しませんが、劣化しないというのは、つまり本当にはそこに実物など存在しないからに過ぎないのでした。この実物でないデジタルデータを嘗め回していても、脳はずっと飢餓状態で退屈しています。

手書きのラブレターであれば、そのように、文面も含めた、一通の「作品」として、人はやりとりします。だからこそ、受け取れば貴重に感じられますし、そのぶん、いざ作って贈ってみようとする、とても難しいのでした。

自意識の正当な仕事は、「データでよい」「データのほうがよい」という仕事です。たとえば、野生のライオンが人に襲い掛かるときの映像があったとしたら、それを観察し、分析し、有用なデータ化するのが自意識の仕事です。一方、このとき脳は何の仕事もしていません。目の前にそういう映像があるというのは、別に危機でも何でもないので、ライオンの映像を観ているところにハチが飛びこんできたら、そのとき脳にとって恐ろしいのはライオンではなくハチです。

自意識の仕事と脳の仕事は、そのように明確に違うわけですが、じっさい、自意識の仕事のほうも、人間の営みには必要なものです。たとえば、いくら恋人とは脳の営みがあるべきだといって、彼氏がいつまでも自分の食品アレルギーを覚えてくれないというのでは、困りますし、ちゃんと想ってくれているのか疑わしくなってしまう。

彼女が金属アレルギーだというので、彼氏はそのアレルギーに触れない指輪は無いのだろうかと探し始めます。そのようなとき、インターネットはとても便利です。また、ネットで調べた情報だけでなく、装飾の専門家に相談してみるのもよいことでしょう。

それらは自意識の正当な仕事であり、人と人との、自意識を通じた正当な営みです。自分の母親は足が悪くて車椅子だというのに、バリアフリーの店とルートをきちんと調べてアattendしてくれたというとき、その配慮は人を喜ばせるでしょう。これらのことは必要なことなので、そのために「みっちり勉強すべき」だと、前回の講義で申し上げました。人は動物とは違う暮らしをしていくので、自意識の機能は自意識の機能で鍛え上げていなくてははいけません。そしてその機能を鍛え上げるというのは、「合理的でかつ頑強」というほうに、鍛え上げるものだとし申し上げました。PCのパワーアップと同じで、高熱と轟音を発するのはパワーアップではない、それはむしろスペックダウンだと、このことはまったくわかりやすいと思います。

それが自意識の正当な営みですが、一方には、正当でない営みもやはりあります。営みにはよろこびが必要なのですが、今申し上げてきたとおり、営みのよろこびのために自意識を使うというのは、そもそもの機能として使い方の誤りなのです。あなたはこの段で、「自意識には正当な使い方がある」ということと、同時に、「それをよろこびを得るために使うのは誤りだ」ということを、理解してゆかれればよいと思います。

食事をするのに箸使いは必要ですが、箸が「美味しい」わけではない。合理的でかつ頑強に鍛えられたPCを、“よろこびのために使う”というのは、それだけで何かおかしい感じがしますね。その感じは当たっています。このまま先に進んでください。



意識は「陶酔」する

自意識にはそもそも「よろこび」を得る機能がないのです。第四講で説明したとおりになります。それでも、脳が弱くなり寝たきりになって、パケット専門人になってしまったら、よろこびを得ようとするにも自意識しかその機能のアテはなくなります。

それで、自意識に、そのよろこび(のようなもの)を得させようと、アテにすると、自意識にはよろこびの機能がないので、代わりに得られるのは「陶酔」になります。自意識は陶酔を起こす機能があったのでした。それは一種の快楽ですから、表面上「楽しい」ですし、いっその楽しさは表面に直接くるため、強烈とってよいかもかもしれません。

ですが、あくまでも、自意識によるこびを得る機能はないので、それはよろこびではありません。「現代と恋愛」という大タイトルに引き当てていけば、現代の恋愛は、本来あるべき営みのよろこびにすりかわって、陶酔がそれを占めていることとなります。現代が自意識の時代だとするならば、現代は陶酔の時代であり、人々は営みに陶酔を得ている、ということになります。

ですが、陶酔は、必ず「飽きて」しまいます……このことに進んでいく前に、ひとまずここまでのことを整理しましょう。「自意識は陶酔する」ということ、自意識には陶酔の機能があるということ、あなたは明確に知ってゆかれるべきです。

たとえば犬や猫などの動物は、どうしたって陶酔を起こすことはありません。我々は犬や猫やその他の動物に、陶酔によるイヤラシサを見ることがありませんね。それは彼らが自意識というものをほとんど持っていないことによります。自意識が無いので、そもそも陶酔を起こす機能自体を持っていないのです。

それと同様に、乳幼児だって、まだ自意識がほとんど形成されていませんので、陶酔を起こすことができません。人間がはっきりとした陶酔を起こせるようになるのは、おそらく自意識が急激に発達する思春期以降、ということになります。今、俗に言われる「中二病」というのはこれのことを指しています。自意識が急激に発達するにつれて、そこに起こる陶酔に遊ぶクセが強くつく、その表れのことを、あくまで揶揄としてのスラングですが、「中二病」といいます。これは誰でも発達の過程で体験することですし、特に悪く言われるべきことだとは思えません。思春期に急激に発達した自意識は、その後、合理的かつ頑強に鍛え上げられて、「みだらに陶酔グセに耽(ふけ)る」というようなことはなくなっていくます。そこまできちんと鍛えられてゆかない人がいたら、その人は単に鍛えられていないという点において、いくらか冷たく見られるでしょう。それは特に注目する必要もない当然のことです。

自意識にはよろこびの機能がないため、自意識によるこびを得させようとする代わりに「陶酔」になる。ですからやはり、営みのよろこびを得るためには、脳のほうを鍛え、脳の営みを広げてゆくべきなのですが、その脳の機能が飢餓によって弱りきっているのが現代でした。ですから、「陶酔」が文化になっていくよりしょうがないところがある。「陶酔」のもたらす、弊害も含めて……このことから、実際に我々が目にする「現代」の様相が作られてゆきます。

こちらが整理しながら進めてゆきますので、あなたは整理に気を取られず進んでください。

陶酔は必ず「飽きる」

陶酔は必ず飽きます。それも、ずいぶん早くに、その飽きはやってきてしまう。そして、そうして飽きたり慣れたりしてしまったら、今度はもっと強い陶酔への材料が必要になります。キリがないという状態になる。

ちょうど麻薬の中毒と同じです。麻薬も、初めのうちは少量で、抜群の陶酔が得られるのですが、それはすぐに耐性がつき、慣れてしまいます。そうすると、もう投与量を増やしていくしかなくなります。そして麻薬の投与は基本的によろこびではないので、陶酔が冷めたあとには、やはり何も残っていません。それで結局はさびしいので、それを紛らわせるためには、やはり麻薬を投与するしかなくなる。そうして破滅を知りつつ破滅に向かうのも、人生の一選択かもしれませんが、本講義ではそこまで話を広げず、それは不毛な筋道だと捉えることにします。

陶酔は必ず飽きてしまいます。そして冷めるのも早いものです。これは恋愛で典型的な例を見ることができます。まったくノボせるようにして恋におち、付き合いだしたものの、すぐに「冷めた」と言い出す。そして冷めてしまったら、もうその人のことが好きでも何でもなくなってしまう。好きどころか「うっとうしい」というほうが強くなり、別れますが、別れると今度は、その人のことをきれいさっぱり忘れてしまいます。「付き合ってたんでしょ」「そうだけど、正直すっかり忘れた」と笑い話になる。

陶酔は、いくらそのとき盛り上がったとしても、「思い出」にはならないのでした。このことは、あなた自身、自分の思い出を振り返ってみればわかります。あなたの「思い出」は、振り返って胸を打つように感じられるものについて、思いがけずどれも陶酔的な記憶ではないはずで、一方で、「昔はあんなにキャーキャー言っていたのに」というようなものについて、あなたはきれいさっぱりそれを忘れ去っており、何も思い出に残っていないということを見られるかもしれません。

あなたは「よろこび」と「陶酔」を区別できるようになられるべきです。それは同時に脳の営みと自意識の営みの区別でもある。別れたとたんに、「なぜあんな人に意地になっていたんだろう」と冷めかえるような交際があります。それはまるでパチンコ遊びにハマっているおばさんが、店を出た途端に自分の損失に冷めかえるような状態です。陶酔的な文化物に触れて、何かひとしきり真実の鳥肌を感じたような気になります。が、それは数時間もしないうちに抜けていってしまいます。それが抜けていってしまい、何も自分のうちに積み重なっていかないのは、麻薬のような、陶酔の中毒物に過ぎないからです。

僕が高校生だったころ、さして友人でもなかった友人が、なぜか僕に打ち明けて話してくれたことがあります。耳打ちするように、他に聞かれないようにでしたが、「ライブに行くと、その熱が、三日ぐらいは抜けないんだ」と、彼は話しました。それはつまり、ここ数日の彼の挙動のおかしさについて、彼が秘密を話してくれたということです。

それに比べて——比べるのはよくないことですが——たとえばサッカー日本代表の試合があるたびに、渋谷の夜は荒唐的に騒ぎになります。それは、熱狂なのか、と見えるのですが、その熱は、翌日の昼にはもうすっかり抜けているように見えます。「あの試合を見て以来、おれは自分の仕事を貫くと誓ったんだ」と、数年間も走っている人はあまりいません。「勇気もらった」と強く言うならば、それは本来、たとえば受験生の勉強する一年を支えたとか、そういうことでないと、本来おかしい。

どれだけ熱狂的に見えても、それが陶酔でしかなかったとしたら、それはすぐに抜けてゆくのです。人に真実や勇気や励ましを与えたりは、本当にしません。それは、その最中には、本当にわからないことなのだとともに。

本講義では、必ずしも、その陶酔を悪いものとは捉えませんが、思春期などは特に、自意識の急激に発達する時期なので、そこに「若気の至り」というような、陶酔だけで付き合った際というようなものが

あることは、誰にでもあることで、悪く言われるようなことではないと思います。また別に思春期でなくとも、あるいはパチンコ遊びであっても、陶酔が完全なゼロというのは、それはそれで人間として不自然です。本講義はそのように、陶酔にいくらか鷹揚な立場を、合理的に採るものですが、かといって、「陶酔とよろこびの区別がついていない」というのは、まったく別の問題だと捉えるものです。あなたもすでに、その区別がつかないのは、論外だ、陶酔は陶酔でかまわないにしても、と、同意されうることだと思います。

その、陶酔とよろこびの区別のために、あなたが知ったのはこのことです。陶酔は「飽きる」ということ。早くに抜けてしまい、思い出や、大切なもの、支えや励まし、勇気や知恵といったものを、実は何も残さないということなのです。

また、そうして何も残さないというだけならよいのかもしれませんが、陶酔は中毒性のあるものなので…「飽きた」の次は必ず「ぶりかえし」ます。パチンコ遊びで大損をしたおばさんが、翌日にはまたパチンコ屋に行きたがることのように。

自意識にはよろこびの機能がありません。脳にしかよろこびの機能は無いのですから、脳機能の喪失は、そのままよろこびの喪失です。そして、人間は、よろこびの無い時間をずっと過ごしていくということには、そうそう耐え切ることができないのです。それで、得られないよろこびの、寂しさの手当に、「陶酔」をするという遊びは、ますます中毒性を帯びてゆきます。

中毒性を帯びて、それに依存し、抜け出せないというのでは、それはもう遊びという次元を超えていますね。根本的な解決はきっと、脳の営みとそのよろこびが回復されることしかないと思います。



い わゆる自意識過剰とは

前回の講義でも話しましたが、いちおう復習しましょう。自意識過剰というのは、自意識による「陶酔」、その"焼きつき"のようなものが、習慣になり、とっさにそれを繰り返してしまう、そのパターンが自分に染み付く、ということです。周囲の人々が自分に注目している、という幻想は、幻想なのですが、真に受ければ陶酔することができます。陶酔の中毒になり、陶酔にハマっている人は、ほとんど自動的に、その陶酔のあるほうへバツと飛びつくようになります。周囲が自分に嫉妬している、と幻想を持てば、プラスのほうへ陶酔できますし、周囲が自分を笑っている、嫌っている、と幻想を持てば、それはマイナスのほうへ陶酔を起こします。陶酔の、プラスマイナスはあまり関係が無いのです。陶酔は陶酔であるだけで、ある種の快楽を帯びており、人を中毒にします。自信過剰も自己卑下も、陶酔があり、その陶酔への中毒というのが本質です。自信があるとか無いとかいうことは、本当にはどうでもよくて、その自信うんぬんを「ネタ」に、自意識が「ワーッ」となる、その"焼けつき"にハマっているのです。ただし、そうして中毒になりハマっている、その習慣から抜け出すのは、そんなに容易なことではありません。やはり脳の営みとそのよろこびから得られるまで、根本的な解決の筋道は無いと思われまます。



陶酔の技術が進化する

現代が自意識の時代であるならば、それは陶酔の時代ということでもあります。そして陶酔の時代であるならば、その陶酔のための材料が、時代的に求められているということが、事実になります。是非はともか

くとして、たとえば麻薬中毒の人があふれかえっていけば、麻薬は実際強く求められているというように、是非はともかくとした事実が成立する。現代はその点で、陶酔への需要があり、需要があれば供給もあります。その需給の中で、人に陶酔を与えるもの・与えやすいものについて、それを製作する技術が向上してきたという、このことも事実です。そのことについてお話しします。

ただし本講義では節度として、具体的にどれがどうだということは申し上げたくありません。あくまで一般論としてお話しすることで、十分な理解——と心当たりを——をあなたは得られるものと思います。

自意識の性質というところへ、再び戻りましょう。自意識の機能は、パケット情報の処理であり、表面的脈絡の検査でした。パケット情報の処理ということで、「パケタイズした情報を」「無数に」「ジュースのように流し込む」ことが、自意識を陶酔させるのに有効です。脈絡というのも、本当に難しいものだと、それは「みっちりした勉強」になってしまうので、そうして噛み砕かなくては飲み込めないものではなく、「ジュース」のように甘く一気に流し込めるものが、自意識を肥え太らせるのに有効です。

単純な音や、単純な意味、単純な明滅、単純な刺激を、とにかく数多く、矢継ぎ早に流し込むこと。極端に言うと、打ち込みのビート音と共に、明滅するランプを備え付け、そのビート音に沿わせて、「各駅の映像」と、その「終電時刻の大きな告示」を、早いテンポで次々に表示する、そこに何かしらの甘露——たとえば美少女の画像を貼り付けるなど——を伴わせるのも有効です。とにかくそういうのを、速いテンポでガーッと流し込む。それで最後に、

「終電までまだ時間がある」

というような、本当には何の意味もないけれど、それを意味ありげに「カッコツケ」に出せば、そもそも陶酔を欲しがっている誰かは、そこにありうる陶酔にバツと飛びつきます。「テンション上がる」という言い方をされるでしょう。

それが、架空ですが、ひとつの極端な例です。そういったものは、本当になんでもよくて、とにかく速いテンポで、音と光を伴わせ、甘露やカッコツケの何かを、矢継ぎ早に流し込めば、それだけで自意識は陶酔します。それは単純な、自意識の性質なのでした。自意識を陶酔させるためなら、「1本で100分の映画をじっくり観る」より、「1分で100本の映画のカット・シーンを振り返る」というほうが陶酔します。音と光の明滅を伴わせて。ですがそれはもちろん、1本で100分の映画をじっくり観たそれよりも、じっくりしたものは残しません。急激な陶酔があり、急激に抜けていくだけになります。

その他にも色々な方法が考えられるのですが、その方法論を追求することが本講義の目的ではありません。本講義では単純に、これを「自意識用の陶酔ジュース」と呼ぶことにして片付けることにします。ジュースは「刺激的で飲みやすい」ことが本位です。飲みやすいというのは、「理解が容易」「とにかくわかりやすい」ということであり、刺激的というのは、べったりと甘露であったり、奇抜なスパイスが混ぜ込んであったりです。

重ね重ね、その「陶酔」が悪いというわけではないのですが、それでジュースに中毒になり、自意識がひたすら肥え太っていくというのでは、誰にとっても不本意であるはずですが。ましてその陶酔ジュースは、後には何も残さないのですから、陶酔が冷めれば、やはりよろこびの無い寂しさばかりがあり、さらに強いジュースにしがみついでいこうとしてしまう。

近年、時代に合わせて、この「ジュース作り」の技術が、ずいぶん向上しています。それは巧妙になったというより、ひどく大胆になったという具合です。そのジュース作りの仕方が。あなたがスマートホンからウェブサイトを開いただけでも、かなり警戒すべきものがそこにはあります。そこに情報「数」が、ジュースの分子のようにひしめいており、どれもこれも「理解に容易」で「刺激的なトピック」を伴っていることに、あなたは今日から気づくことができると思います。あなたがそのジュースに、「なんとなく」触れているつもりでいらっしやっても、ジュースの作り手側は、それを「なんとなく」では作っていません。あなたの自意識に「陶酔」を与えるために、入念に、それは作り上げられてあるのです。(試みに、情報数の「さびしい」ウェブサイトを探してごらんください。そんなものはもう見つからないはず)

情報数が多いと、陶酔が起こりますから、さびしさが紛れます。あなたが習慣的にスマートホンを覗き込み、コンビニエンス・ストアに立ち寄るとしたら、その動機のほとんどは、実はさびしさを陶酔で紛らわすためなのです。そしてそれはすでにほとんどの場合、習慣化を完了させています。

重ね重ね、そうした陶酔の機能と、陶酔の現象は、それ自体が悪だというわけではありませんでした。ただ、それを自分がやっているのに、その自覚がない、知らない、というのは、また別の話になります。あくまで、自分はそのようなことを割とするのだと知った上で、どの程度それに遊ぶのか、どこからが「度を過ぎる」とするのか、それを自分で決定するのが、陶酔との距離感の取り方です。



情

報数でコミュニケーションすることの疲れ

人がよろこびの機能を失い、陶酔の機能でそれを代替させるとしたら、人と人とのコミュニケーションも、その中に陶酔を作り出そうという向きになります。それで、「テンションを上げていこう」ということへ、人は向かいがちになります。自意識を陶酔させるのは情報数でした。それも、理解の容易で、刺激的な、「ジュース」であるほうがよいとお話ししてきています。

たとえば、矢継ぎ早に自分についての情報を語っていくことで、その情報数陶酔を引き起こそうというやり方があります。「自分は〇〇大学を出ていて」「仕事は三つも転職しててさ」「最近ひとつポカをやって」「課長とケンカになった」「でも自分は格闘技やってたし」「最近ジョグとかフットサルだね」「マラソンに出ようと思っていて」「靴の趣味が変わると服の趣味も変わるよね」「けっこう凝り性で、血液型のせいかな」「これフットサル大会で準優勝したときの写真」「こいつとは別のサークルもやってるんだけど」「あとおれ植物系が好きで苔とか育ててるんだよね」「この夏はB級グルメに凝る予定でさ」「あと流星群とか興味ある?」、と、矢継ぎ早に聞かせるやり方です。「テンションを上げていこう」ということで、こういう話し方をされる方は少なくありません。

これらの情報は、どれも理解に容易で、それなりに刺激的なのですが、これがずっと続けられるかというと、もちろん続けられません。どれだけ話題の豊かに見える人間でも、四、五回も会って話せば、そういう話題の「ネタ」は尽きます。

ではそれで、話題が尽きたから黙るかということ、黙ってしまうと、コミュニケーションが途絶えて、情報が無いという「さびしさ」が押し寄せてきます。そこで人々が取り出すのがスマートホンです。友人同士で集まっているのに、それぞれがスマートホンをいじっているという光景を、あなたも珍しくなく見かけたことがあると思います。あれは話題が尽きたから、もう「テンションを上げる」ということもできなくなって、それぞれさびしくないようにと、あのような状態に行き着きます。

最大の問題は、そうして「テンションを上げて」、情報数を矢継ぎ早に聞かせていったとしても、結局その人がどのような人なのかわからない、ということです。パッケージした情報を集合させても統合はしないとお話ししてきました。彼がどのような人であるかという全体的情報は、脳でのコミュニケーションが起こるまで得られません。

ですから、これは疲れるのです。テンションを上げてがんばった、そしてさんざん話した、話題が尽きるまで話したはずが、結局互いのことが何も伝わっていないという感触になる。この疲労と無力感が、人を次第に「病んでる」というほうへ押し込んでいきます。自分のことが相手に受け止めてもらえないというのは、それだけでも辛いことなのに、さんざん情報を伝えようと努力した結果、なお伝わらないので、絶望が押し寄せてくるのでした。

あなたはこのような例をイメージしてください。外国の人が、「日本人は食事に箸を使うんだろ」といって、台所から食卓まで、料理をひとつまみずつ持ってきます。あなたはそれを見たら必ず、「それは使い方

が違う」と言うはずで。確かに日本人は食事に箸を使いますが、それはそういうことではないと。食卓に全て運ばれてから、ゆっくり、ひとつまみずつ楽しむ、そのために箸を使うのです、とあなたは説明されるはずで。

自意識がパケット情報しか取り扱えないというのはそういうことです。ちょうど料理の全体から、煮物のひとつをつまみ上げるように。一方、脳が全体的情報を取り扱うというのは、料理を全てお盆にのせて一気に持ってくるということです。

もし本当に、台所の料理を、箸でひとつまみずつ食卓に運んできて食べさせるというのであれば、疲れません。どれだけ箸使いが上手であっても疲れ果てるでしょう。その挙句、「どんな料理を食べたのかよくわからない」と言われるのです。これでは、いわゆる「病む」ことから逃れられません。

それで、疲れ果てないために、病まないために……コミュニケーションを諦めて、それぞれにスマートフォンをいじり始めます。情報数といえば、人間がその端末に勝てるわけがないのでした。

ただし彼らは、楽しむことまで諦めたわけではありません。コミュニケーションというのも、それをする機能を与えられていないだけで、本当に諦めきっているわけではない。ずっと誤解をしていて、箸で情報を運搬することをやめられないでいるだけです。彼らはそうして、テンションを上げてみたり、疲れて下げきったりして、それでも「何か起こるのか」「何も起こらないのか」と、実は内心でしぶとく、見守るのを続けているといえます。誰だって、若いうちから、本当には、友人やコミュニケートが要らないとは思っていませんから。

本当に全てを諦め、楽しむということや、「何か起こるのか」ということも諦めきったとき、人はもうそうして呼び出しあうこともなくなり、スマートフォンをいじることさえなくなります。最近になってよく言われる、「病んでる」であるとか「メンタルがやばい」であるとかの先は、そういう、本講義では「麻痺型」と呼ばれるところにつながっています。

それはまた次回の講義で説明されるでしょう。本講義の主題はここまでです。お疲れ様でした。



の第八講では、ひとつのことだけを理解してください。"自意識には「陶酔」という機能がある"ということです。このことだけ決定的に理解していただければ、全体の構造の把握は容易であると思います。脳の機能が弱まれば、脳の営みは失われ、ひいては営みのよろこびも失われる。よろこびを失った人々はどうするのか？ それは、自意識の陶酔で代替されるだろうというのは、自明と呼んでよいほど、眼に見えてわかる手続きになります。

やや危険な言い方をすれば、このようにも言えます。あなた自身の心当たりの中で、このことの構造を確認してみてください。あなたの心当たりの中にも、たとえば、「この人は社会活動に熱心なところがあるが、どうも陶酔的だと思う」と思える人がいるはずで。あなたはその人のことについて、「この人は脳のはたらきが活発ではないだろう」ということを、どこかで見抜いて知っています。また、「活動の熱心さの割には、周囲と深くコミュニケートはできていないだろう」ということも、なぜかあなたは知っているものです。だから正直なところ、あなたはその人のことを、活動も含めて、豊かだとかうらやましいだとかいまいち感じないのです。その人のようにになりたいかと問われれば、あなたは慌てて首を横に振るかもしれない。

「わざとらしさが横行する」という講義を、第五講でしてあります。「テンションを上げていこう」とす

る、いわゆる「リア充」の、わざとらしい騒ぎの中、あるのはよろこびではなく陶酔です。ですからそれは、その場だけは盛り上がっても、積み重ならずに、一時かぎりできれいに霧消していきます。たくさんの人と「知り合った」、肩を組みあい、騒ぎあった、大声を出し合った……としても、本当にはコミュニケーションが起っていないので、誰のこともわかりあっていません。たくさんの人、身の上の情報を、直接にもオンラインにも得たとしても、やはり自分は誰かのことを知っていることにはならず、また、自分のことも、結局誰にも受け止められてはおらず、知られていない。

そのようなことの中で、賑やかな騒ぎの裏側で、人々は疲れています。その疲れに、まるで自覚が無いというような人は、きっと本当にはほとんどいらっしゃらないと、感じられてなりません。ただ、疲れたと言いつい出してもしょうがないし、これしか方法がないのだからと、気を張っているというのが本当のところでしょう。その気力が萎えたときには、「最近病んでる」「メンタルがやばい」と、たまにこぼすようにしながら。

陶酔はよろこびの代替には結局ならないというのが、本講義の採る立場です。代替にならないものをずっとそうしていたらどうなるのか、というのか次回の講義になります。今回はここまでになりますので、このまま勢いよく次の講義まで消化してください。

第九講

麻痺型と決壊型

「メ

ンタルが強い」「弱い」という言い方をよくします。気持ちが黒く追い詰められるとき、

「メンタルがやばい」という言い方もします。

現代の人々は、「メンタル」ということに注目しているようです。合わせて、メンタルヘルスという言い方も出現し、略して「メンヘル」、er系をつけて「メンヘラ」という言い方も出てきました。「メンヘラ」というのは、狭義には、その症状によって社会生活を困難にし、専門の医療に掛かっている人のことを言います。広義にはどうでしょうか。広義には、今のところ定かではありません。

あくまで臨床心理学の話として、「メンヘラ」というのは、自我・自意識の機能が、生活上に困難をもたらすだけ、不具合を起こしていることを言います。さて現代は自意識の時代だと本講義は指摘していますが、自意識が本来の機能と違う使われ方をして、「焼けつき」「こすりあげられ続ける」のであれば、それは時代の「メンヘラ化」を当然加速します。

臨床心理学では、自我と無意識という分化を捉え、本講義では自意識と脳という分化を捉えているので、主題とする構造は異なりますが、本講義もわかりやすさのため、その「メンヘラ」という語を借用して使うことにします。ただしその使い方は、臨床心理学（および精神医学）における狭義の使い方とやや異なると、先にお断り申し上げておきます。元々の「メンヘラ」という語がスラング的なものなのでよいでしょう。

前回の講義を復習します。脳の機能が失われ、脳の営みが失われると、人々は生きる中での「よろこび」を喪失します。よろこびなしには生きてゆけないので、どうするかというと、自意識に起こる「陶酔」をもって、よろこびに代替するということでした。ただしそれは、機能本来の使い方ではないとも、前回申し上げてあります。

その、機能本来ではない使い方を続けてゆくとどうなるか……機械でもそうですが、それはやがて故障してゆきます。傷んで、不具合を起こすようになる。そこに不具合を起こせば、「メンヘラ」になるか、少なくとも、「メンヘラ的」にはなってしまいます。

ただ、その「メンヘラ的になる」ということの、実際的な表れは、およそ一般には思われているのとは異なります。それはもっと、こっそりとした、目に付きづらい、いつの間にかやってくる、厳しい現象です。それで、その点をわざわざ講義にする必要があります。本講義の完了後、そのことへの見方を、受講生であるあなた自身がすっかり変えられているでしょう。

それでは講義を始めます。

初

めは上手くいく

「よろこび」の代わりに、自意識の「陶酔」で、心の養分をまかなおうという発想ですが——以後、「陶酔式」と呼びます——これは初めのうち上手くいくのです。特に、当人があるていど、「要領」が良い場合には。

ある人は、「リア充」であることを目指すでしょう。「イケメン」である彼氏を作り、彼氏ともども、色々なイベントに参加する。「B級グルメ」というブームが自意識に引っかかってくれば、彼氏ともども、

その体験へのプランを立てます。「リア充」というイメージを追いかけているのですから、週末の予定は「充実」していないといけません。サッカーよりフットサルのほうがブームなら、そのマネージャー役でも買って出ます。「女子会」なら「女子会」のブーム、「婚活」なら「婚活」のブームに反応します。自意識というのは、そうしてパッケージされた情報しか処理できないのです。そうしたパッケージ情報の"行為"を、自分が「たくさんやっている」というのは、わかりやすいですし、刺激を伴ったジュースとして、自意識を陶酔させます。

要領か趣味かの問題で、「リア充」というのができない場合でも、文化物や無数のコンテンツの中に、陶酔を与えてくれるジュース物が、現代はたくさんあります。これらで陶酔して遊ぶことは、実際楽しいですし、何より今は消化しきれないほどのたくさんのコンテンツが与えられ、また低コストで入手に利便も整っています。こうして、無限にあるかと思える遊びの中で、楽しい陶酔を追求していくということは、実にありふれていますし、何も問題はないように思えます。「別に、やることやっていればいいじゃん」と彼らは言うでしょう。そのこと自体に、確かに何の問題もありません。

現代にまったくありふれた、これらのやり方は、「初めのうち上手くいく」のです。少なくとも、何も問題はないように見えます。たとえ「リア充」の「イベント」が、その中でのやりとりも含めて、「何かわざとらしい」ということであっても、通常、それはそんなに目くらまを立てることはありません。「リア充」がいささか軽薄すぎると感じられる場合は、「自己実現」というのもよいでしょう。

あるいは、新興の文化物やコンテンツが、ひょっとすると、それを楽しむ当人にさえ「何か不健全だ」と感じられていたとしても、通常、「でも楽しいんだもの」ということで、片付けられます。その点は本講義でも、陶酔そのものがただちに悪というわけではない、とお話ししてきました。

ただ、前回もお話ししたように、それらは陶酔である以上、すぐに飽きるのです。飽きますし、すぐに慣れて、耐性がつきます。そうすると、さらに陶酔を得ようとしたとき、麻薬と同じで、拡大投与するしかなくなります。それを拡大投与できているうちはいいのですが……やがて「もう無理だ」という臨界点が必ずやってきます。無限に拡大はしてゆけません。

だからこの現代のやり方は、初めは上手くいくのですが、途中で倒れるのです。そうして倒れたとき、でも他にもうやり方は持っていないのですから、手詰まりになります。

そしてこのことは思ったよりも恐ろしい結果をもたらします。さらに噛み砕いてお話ししましょう。



麻痺型への移行

ある大学生がいたとしましょう。彼はいわゆる「大学デビュー」の野心を秘めていて……それに成功したとします。彼は眉目や髪型を「オシャレ」に整えて、「イケメン」であることを手に入れます。サークルに入ったり、ダンスをやり始めたりして、自分を充実系にしていきます。意識的に、アルバイトもぎゅう詰めにしていくかもしれません。キレイ系の彼女も手に入れて、典型的な「リア充」になります。彼女の誕生日には、「誕プレ」を用意し、クリスマスには「超ロマンチック」な何かをするでしょう。それで物足りないときは、「おれ割とおたくなところあるんだよね」と、いわゆる"ファッション・オタク"のような軽度のオタク趣味にも手を出します。

彼は「負け組」になりたくないのです、地位の高い企業に入社します。それで仕事は大変になりますが、彼は「デキる男」を目指して、その陶酔をやはりエネルギーにするでしょう。もちろんそれだけではつまらないので、夜遊びには「チョイ悪」のようなことも目指します。そして家を買って、子供が出来て「パパ」になり、「やっぱ父親って"怖い"存在でないと」ということをしたり、よきパパを目指したり、「一家の大黒

柱」をやってみたり、あるいは「アクティブ系」になってみたりします。改めてジョギングを始めたり、陶芸や一眼レフカメラやヨガを始めることも多い。ワインや料理に凝ることも多いでしょうか。

ですが、さすがにそのあたりで「ネタ」が尽きます。彼はもう若者と呼びづらい年齢になっていますし、その年齢ではもうさすがに何かの「ブーム」には似合わなくなります。

ブーム的な単語や、〇〇系といったもの……考えてみればそんなパッケージされたものが、無限に拡大するわけが無いのです。彼はたくさんのかつことを、熱心に、精力的に、やってきたように見えますが、ここで振り返ってみてどうでしょう。彼は、本当には、「何もしてきていない」のではないのでしょうか。陶酔というのは、そのときくらい盛り上がり、思い出にはならないと、前回お話ししています。

この、もう「ネタ」が尽きたという瞬間、彼の気持ちはプツンと切れます。「色々、何かもう、終わった」と感じるのです。それは「もうこの先、自分が陶酔を得る方法は無くなった」ということ、どうしようもない発見です。

このときから彼は、精気を失い、心が止まってしまったような、「麻痺型」になってゆきます。陶酔を原動力と報酬にするというシステムが停止してしまいました。そのことを説明してゆきましょう。



「陶酔式」の判別法

麻痺型のお話をする前に、ひとつ有用なことがありますから、お話ししておきます。何かが楽しいというとき、あるいは有意義と思えるとき、それが脳の営みなのか自意識の陶酔なのか、区別がつきづらく感じられます。ですが実は、それが「人と人とのコミュニケーションを含み」、なおかつ「利得を媒介としない」ことであるならば、あっさり判別できる方法があるので、あなたは知ってゆかれるとよいでしょう。

それは単純に、「明日も同じことができない」ということです。

たとえば「鍋パ」というようなものをしてしましましょう。それがいかに盛り上がったとしても、「じゃあ明日もやろうか」と言うと、それについては全員がのけぞり、なんだかんだで拒否することになります。

おかしなことだと感じられませんか。それがとても楽しくて有意義なことなら、明日もやろうという話になり、全員がそれに飛びつかないではおかしいはず。昔の大学生などは、放っておけば一年中でも毎日麻雀をしているようなところがありました。それに比べれば、華やかで楽しく有意義な「リア充」のことなので、それはもう毎日ずっとやっていたらよいはず。

それが、毎日どころか、明日にも出来ないのはなぜなのでしょう。実はそれが、「しんどい」ことだからなのです。自意識でコミュニケーションするのは、台所から食卓へ箸で料理を運搬することのように、使い方を間違っており、しんどいのだと前回お話ししています。そして陶酔というのはすぐに飽きますから、明日同じことをしてもこの陶酔はもう得られないということを誰もが知っています。それで「明日も」というのは拒否することになる。

そうして、一見「リア充」のよろこばしさに見えるものも、実は明日にも付き合えないものだというのに、あなたはこっそり気づいてください。そして「リア充」といって、恋人や伴侶を求めるのにでも、そうして毎日どころか明日にも付き合えないような中から、恋人を得ようというのは間違っています。恋人や伴侶というのは毎日を共にゆくものではないですか。恋人や伴侶というのは、「人と人とのコミュニケーションを含み」、「利得を媒介としない」ものです。

ちなみに僕は学生のとときに、毎日パーベキューをしていた時期があります。「なぜいちいち帰宅して晩飯を食う必要があるんだ」という調子がみんなであつてのことでしたが。あるいは、夏休みに出張があり、一泊だけ初対面の知人宅に厄介になるはずが、意気投合して、一ヶ月も一緒に暮らしたことがあります。

「明日もはできない」というのは端的に言って"間違い"です。そこに脳の営みとよろこびがあれば、それを毎日することは、疲れることではありませんし、可能であるどころか、「惜しくてやめられない」ものです。

「麻痺型」の構造

さて話を戻します。「リア充」を体現するように生きても、それで自意識を陶酔させる「ネタ」はやがて尽きるという話でした。「自分はこの先、もう陶酔を得ることができない」と悟ってしまったら、もう気持ちがプツンと切れ、急速に麻痺型に移行してゆきます。

それはやはり、根本的に、自意識の営みが「しんどい」からなのですね。特に、使い方が間違っているそれはひどくしんどい。これまでは、そのしんどさを、陶酔がカバーしてきたのでした。ですがもう陶酔が得られないとなったら？ それはもう、むき出しでしんどいに決まっています。だからもう、自意識の機能も、できるかぎり使わないようにしたいと、頑なになってゆきます。「ルーチンワークだけして死んでゆきたい」と真剣に言い始めます。

例えば彼の場合、仕事に新人の後輩が入ってきたら、これまでは指導に熱心だったかもしれませんが。「デキる人ぶり」「アツイ先輩ぶり」「仕事が自己実現」をもって、そのことへの陶酔をエネルギーにできましたから。ところがその陶酔がもう得られないのだとすれば、もう新人の後輩なんて、しんどい、うっとうしい、面倒くさいだけです。また仕事を一から教えなくてはならない。そのうっとうしがる態度は、先輩という立場が強いので、いっそ堂々と表明されます。その態度が冷たいとかどうとかは、もう彼にとってどうでもよいことなので、ほとんど控えられません。

もう陶酔は得られないと判っているのですから……すばり言うと、彼の自意識はもう、「何も聞いていない」という状態になります。そうするのが一番ラクだからです。自意識の営みにもう利益がないので、営みが起こらないようブロックするのです。陶酔が得られなくなった以上、そうして自意識のしんどさをとにかく減らす、ラクにするということでは、彼にとっての利益的なやり方はなくなるのでした。

彼はすっかり、「そういう人」になってしまったわけですが……注意すべきことがあります。彼が「そういう人」になってしまっても、彼のような状態は、一般に"メンヘラ"などとは呼ばれないということです。彼にはそれによって社会生活を困難にしているわけではないのですから。

もし、彼のひどい態度によって、彼の下に入った新人後輩が、仕事を続けてゆけなくなったら、その辞職した彼のほうが、たとえば適応障害などといって、"メンヘラ"という扱いになります。

この問題は、取り沙汰のしようのないほど、あいまいな中で起こるもので、どちらがどれだけ悪いというような、安直な結論には結べません。本講義ではあくまで、陶酔式のやり方の果てに、そうした「麻痺型」があるという話に留めます。そして、「巻き込まれる前提で」、本講義は考えなくてはならないと、以前にお話ししてあります。

「麻痺型」というのは、今お話ししたように、陶酔式がついに頓挫し、自意識が「何も聞かなくなった」という状態です。何も聞かない、何に触れても何も聞き取らない。届かないのですから、それは外側からは剛直な「麻痺」という感触になります。これはいわゆる"メンヘラ"ではないので、接触がないかぎり、その感触はわかりません。

が、いざ接触してみると、本当に「何も届かない」という感触で、人をゾッとさせるものを持っています。本講義では彼のことも"メンヘラ"と捉えるのはそれが理由なのでした。本講義では、「麻痺型」も「決壊型」も、ごく自然なこととして、広義の"メンヘラ"と捉えることにします。

「決壊型」との循環

人はよろこびなしに生きていくことはできないと申し上げてきました。「麻痺型」に行き着いた彼は、一見ずっと落ち着いて、安定しているふうに見えます。何しろ「麻痺」なのだから安定していますね。一見は、そう見えます。

ですが、彼は長い間、よろこびのない中を生きていくことになります。いくら麻痺させて、自意識が「何も聞かなくなる」、そうしてラクをさせていっても、しょせんはしんどい「だけ」の中を生きていきます。これまでアテにしていた「陶酔」も、ついに枯渴したので、もう陶酔式は機能しません。

この静かな絶望の中で……彼は苦しさを溜め込んでゆきます。外側には麻痺してますが、内圧はずっと上昇してゆくのです。

すると、この「麻痺型」は、あるとき突然、「決壊型」に移行します。内圧の上昇が極点にきてついに破裂を起こすのでした。

その実際には、色々なケースがあるのですが……やはりここでは、先ほどの彼を例にしましょう。彼は全てにうつつしそうで、面倒くさそうです。「そういう人だから」で、周囲には通っていたのですが、あるとき突然爆発します。立場の弱い後輩や、部下、女性、あるいは下請けの担当などに向けて。およそ社会的常識からは逸脱した、大声や攻撃的な態度を出します。

彼はこれによって、久しぶりに——何年ぶりか、何十年ぶりかに——「陶酔」を獲得します。それは、自意識の焼けつきの、極限ともいべき、熱での破裂ですから。ここから彼は、「新しい陶酔式」を始めることとなります。過去の、リア充うんぬん、自己実現うんぬんといった、生易しいものではなく、もっと直接的な、自意識の焼けつきのブチマケです。彼はいっそ、「逆に楽しくなってきた！」と鼻息を荒くして言うかもしれません。久しぶりに、自意識の陶酔を取り戻したのですから。

なおこのような場合も、彼はやはり「メンヘラ」とは一般に呼ばれません。あくまで社会生活に困難をきたすという本人の主訴がない場合はそのようには言われません。

ただし勿論、衆目には彼はすでに「狂気じみて」いるので、「まともじゃない」というふうに、慎重に距離を取られます。距離を取るわけですから、当然、そのような警告が、直接彼に伝えられることは無いのでした。彼はそれについて、「誰からも文句は言われていない」と捉えるようになります。

こうして麻痺型は決壊型に移行したり、あるいは、その両方を循環したりします。これはケースバイケースなので一概に言えません。初め決壊型から入り、麻痺型に移行するケースもありますし、決壊というのも、犯罪や自傷であったり、事故であったり、器質的損傷になることもあります。

本講義はそのケースワークを追求するものではありませんので、ここまでに留めましょう。ただ一番多い例、最も一般的な例は、彼のような、麻痺型から決壊型への移行だと思われます。

自意識の「陶酔」を原動力にしていくシステム。その「陶酔式」の行き着く果てに、麻痺型と決壊型があるということをお話ししました。

「メ ンヘラ文化」の中で

"巻き込まれる前提で"、我々は考えねばなりません。「陶醉式」が主流になり、その末梢が次々に麻痺型と決壊型を生み出すのだとしても、それは他所の世界のおとぎ話ではなく、我々が今日も生きていく実世界の話です。単純に、「この中をどう生きていくべきか？」という問題が、それぞれ一人一人に、課されているのです。

「この中をどう生きていくべきか?」。それについて、迎合的あるいは推進的なものを、本講義では「メンヘラ文化」と呼ぶことにします。もちろん、節度として、具体的にどれがどうだということは、本講義では取り上げません。そんなことをしなくても、一般論だけで十分に、理解と心当たりで到達しうることですから。

この現代の中で、或るものは、「どんどん陶醉していこうよ」と呼びかけています。いっその"陶醉っぷり"を、「どうだ強いだろ」「リア充だろ」と見せつけるような。あるいは、また或るものは、その"スカしている"態度を見せつけて、「超越しているの」と呼びかけています。また或るものは、ギャーツと汚らしいほどの自意識のブチマケを示して、「決壊してこそ真実の陶醉があるよ」と呼びかけています。

これらについて、是非をどうこう言うのは、もちろん本講義の趣旨ではありません。ただこれらは、現代における「この中をどう生きていくべきか?」という、「この中」をなくしては、そもそも生まれてこなかったものです。仮に、今でも脳の機能が活発で、豊かな営みとよろこびの中を生活している人がいたら、その「陶醉していこうよ」「いいえ、超越すればいいだけよ」「いや、決壊するしかないのです」というような呼びかけは、何のことやら、すべて「?」というだけの受け止めになります。

なんだかんだで、結局の土台として、自意識を「こすりあげて」くる呼びかけの声。自意識を、無限にこすりあげてゆこうという声、こすりあげに反応しない超越風味を叫ぶ声、こすりあげにただちに決壊せよという声。これは自意識文化の土台においてしか成立しませんから、本講義ではこれを——やむなく——「メンヘラ文化」と呼びます。

あなた自身、「色んなもの"について、「メンヘラ文化ですね」という指摘を、空想の中でしてみてください。そこにギクッとするような、空気の凍りつくような、何か危険なリアクションが予感されるものもあれば、一方で、そもそも「まったく当てはまらない」「かすりもしない」と感じられるものもあるはずです。

逆の具体例を指摘する分には節度に反しないと思いますので、例を挙げておきましょう。youtubeで1980年代前半の映像などをご覧になられれば、なおわかりやすさが増すと思います。たとえば1983年のコカ・コーラのCM。早見優さんが水着姿で駆け寄ってくる映像があります。それらは、現代の我々からして、映像の造りがつたない、平たくいって「ダサイ」のですが、その印象はともかくとして、「メンヘラ文化」という指摘は一切当てはまりません。それが当てはまらないということを、理由抜きにあなたは実感することができます。それは、「ダサイ」のかもしれませんが、それにしても、自意識をこすりあげにくるものがまったく見当たらないからです。先ほど、かつての大学生が一年間でも毎日麻雀をしていたという話をしましたが、その退廃的なムードだって、別に自意識をこすりあげるものはなし、「メンヘラ文化」という指摘は当てはまらないのです。

陶酔三法

単純化して言えば、現代の人々は、陶酔を求めています。「陶酔式」を原理に採用しているのだから当然です。では仮に、その「陶酔式」を積極的に採用するとしたら、「陶酔」はどうやって得るべきでしょうか。具体的に、指針と方法が必要になりますね。

これについて、方法が三通りあります。簡単なことなのでお話ししておきましょう。これらは、必ずしも一つの方法しか採れないというものではなく、あるていどの混在ができます。

1. リア充・自己実現法

言うなれば「王道」です。経済社会の価値観に準じ、自分はその価値観上で「成功」している個体だという認識で、その認識と行為を拡大してゆくことで、自意識を陶酔させます。王道なので、大多数の人ではできるかぎりこれを目指そうとします。逆にこの王道からあまりに脱落する場合、大多数から排斥的に扱われる立場になります。また脱落すればその排斥作用があるため、この王道をゆく人も脱落に対する恐怖心を奥底に抱えているのが通常です。

なお経済社会の価値観に準じていますので、たとえば就職面接などでも、この王道を土台とすることが大前提となり、この王道を無視することはほとんどの人にとって不可能です。

2. 耽美・貴族法

自分を周囲とは違う特別な「貴族性」のもとと捉え、美に強い傾倒があるのだと信じ込み、その貴族気分を拡大することで、自意識を陶酔させていく方法です。先ほどの「王道」とは距離を取り、自分は「一輪の知られざる花」の気分を取り、一方でたとえば"リア充"の集団を、むしろ慈しむふうに眺め、その行為を自意識の陶酔に充てます。

特徴的に、「声をあげて笑わず」「目立たない方向へのオシャレ嗜好が強く」「眠そうで気だるそうな振る舞いを演出するのが習慣になっており」「特別に珍しいふうの言葉をぼそりと自分につぶやく趣味があり」「孤独を積極的に意識して陶酔に充てる」などの点があります。「自分は全て知っている」「わかっている」という立場を採るので、何かに慌てたり声を荒げたりというような態度が自己に禁止されており、すでに大きな声を出せと言われても出せない状態になっていますし、今さら声を上げて笑おうとしても笑えないようになっています。

この耽美・貴族法の多くは、王道であるリア充・自己実現法のほうへ、趣味や要領の点で追従できなかったとき、第一の転入先として選ばれます。

3. 不潔・蛮族法

リア充・自己実現法に追従できなかった場合、耽美・貴族法にゆければよいのですが、あまりに当人がその美性や貴族性を乏しくしている場合、その耽美・貴族法を自分の方法に採用はできなくなります。その場合の多くがこの不潔・蛮族法に行き着きます。

耽美・貴族法に対照して、こちらは「不潔さ」と「蛮族性」の追求を拡大することで、自意識の陶酔を得てゆきます。彼は"リア充"の集団を、「クズの集まり」と眺めます。下卑た声で笑える題材を能動的に探し、オシャレうんぬんを「恥ずかしいクズのすること」と否定的に取る。無神経で傍若無人な振る舞いが習慣になっており、嫌味のあるスラングを撒き散らすこと、万人の低俗性を積極的に意識して陶酔に充てること、などが特徴になります。特にハイソサエティのスカンダルに熱烈な関心を持ち、そのスカンダリズムを人間普遍に当てはめて、その不潔さのあぶり出しに陶酔を得ます。

以上、大きくみてこれら三つの方法があります。そしてこれらは排他的ではなく混在することが可能です。「メンヘラ文化」ということで言えば、文化物もおおよそこの三つの方法の、どれかを主にし、いくらかを混在させて作られています。

「メ

ンヘラ文化」などというのは、もちろん本講義の造語です。「幸いに」と言うべきですが、そのような語でネット検索をかけても、今のところ該当するページは出てきません。合わせて、受講者であるあなたにも、「メンヘラ文化」などというような哀しい語は、この講義限りで捨ててしまい、以降は使われないようにお願いしたいと思います。それは理解を速やかにする便宜の上で必要であっただけで、その後も振り回して活躍させるのに魅力ある言葉ではありません。

この第九講は、たいへんな心苦しさをおして進めてきたということ、白状しておきます。「言い過ぎでは」と、誰よりも僕自身が疑いながら、この第九講を進めてきました。ですが振り返ってみて、今このことは、まったくこのように語られる必要があったと、改めて思います。

健全に生き、また懸命に、善良に、別に歪んだところもなしに、生きている人が、ゆくゆくはそんな「麻痺型」だの「決壊型」だのになるというのは、聞きたくないという以前に、単純に信じにくく感じられます。「そんなわけないだろう」「そんな極端なことにはならないだろう」という気がいかにもします。誰しも、自分とその周囲は、そのような"病的"なところから無縁だろう、と第一に思われると思います。

ですが……それを承知でこの第九講は展開されたと申し上げておきます。僕自身、「そんなわけないだろう」「そんなことにはならないだろう」と言いたくなるケースが、実際に起こってゆくのを、このところすでに、何度も見せつけられています。あんなに「かわいらしい」人であったのに、と、くやしく、苦しく思わされることが、すでに少なくない。そうしたことが起こってくるのは、誰のせいかなどとは言うべきではなく、ただ人々がそう追い込まれていく構造が、現代という時代にあるということです。それには、あるていど、巻き込まれてゆく前提で考えるよりないと申し上げておきますが、巻き込まれていくということは、何の対抗もしないということではありません。この船は沈むとわかっていて乗船させられるのであれば、それなりの備えをして人は乗船するのではないのでしょうか。

このことは、その人が実際に、「麻痺型」などになってしまう前に、お話する必要があります。というのは、当然ですが、実際に「麻痺型」になってしまえば、もう「届かない」からです。十数年の時間をかけて、陶酔式だけで生きてきたものを、麻痺型になり、決壊型と危険な循環を繰り返し始めたという、そんな段になって今さらこんな話を持ち込んだとしても、時間的に出遅れすぎていますし、何よりも当人に「届く」ということがありません。そこから有為に好転が得られるという見通しは、いくらなんでも甘すぎで、非現実的だと思います。

現代が自意識の時代だというなら、それは大きな全体のことであって、そんなものにはわかに変動しません。ですがその中でも、少なくとも、それぞれにフェイルセーフの仕組みを隠し持つことはできるはずですが。フェイルセーフとは、現行のシステムがダウンした際に、自動的に安全・健全なほうへ状況をコントロールするよう働きかける装置のことです。万事が上手くいっている状態、何の問題もなく見える状態の中では、フェイルセーフ装置が不必要なものに見えるのは当然のことです。

そしてもちろん、本講義があなたにお伝えしようとしていることは、それら麻痺型・決壊型の詳細などで

はありません。そんなことは本来どうでもよいことです。ただ、機能が本来性を取り戻し、営みとそのよろこびが取り戻されればよい。そのとき以降、この講義の内容の一切は不要になります。そのときは、あなたがすでに未来に踏み込み、この「現代と恋愛」をすでに過去にしたということになるでしょう。

「なんだかんだで自意識のこすりあげ」。そうして、実は先の無い「陶醉式」が、はびこってきたのは、いつからだったのでしょうか。それを限定して「ここからだ」と言い切ることは誰にとっても不可能です。ですが本講義では、さしあたりの、有用な見方がありうるとして、締めくくりに、時代の変遷を申し上げておきます。いつからこの「現代」が始まったのか。そのもっとも巨大な「目印」は、どうやら1995年あたりにあります。漫画「ドラゴンボール」の連載が終わり、「新世紀エヴァンゲリオン」や「ワンピース」が現れてくる時代です。阪神淡路大震災があり、地下鉄サリン事件がありました。「ブリクラ」が流行しはじめたのも95年、「コギャル」と言い出したのも95年、インターネットに接続するアプリケーションが付属しているのは「WINDOWS 95」からです。

色んなものが終わり、代わって色んなものが始まった。その巨大な節目として1995年を捉えるのは、まったく不自然なことではありません。そしてその中でもっとも大きなブームだったのは「小室哲哉ブーム」です。96年4月のオリコンチャートでは、小室哲哉という一人の作曲家・兼プロデューサーが、一位から五位までを独占しています。これは世界史上に例のないことだそうです。それだけ巨大なブームがありました。そして小室哲哉さんが作り出した、その歌曲もブームも、過去にあった昭和から平成初期にかけてのものとは、何かが明らかに違ったということは、当時を過ごされた万人が納得、いやご存知だと思います。

もちろんこれらは全て、巨大でわかりやすい「目印」でしかありませんが、その目印は、あなたが「現代と恋愛」ということの全体を、構造的に把握するのに有効だと思います。

それではお疲れ様でした。あと残すところ、確認問題と、余談めいた、最終講のみになります。確認問題はきっと、あなたが予想しているよりも簡単なものです。このまま一気にどうぞ。

確認問題

◆問1. 以下の空欄を正しく埋め、選択肢は正しいものを選びなさい。

現代は（ ）が弱り、代わって（ ）が発達する時代である。前者の機能は（1. 全体的情報 2. イメージ）を処理し、後者の機能は（ ）情報を処理する。後者はまた、表面的な（ ）をのみ追跡・検査する。その代表は「 $1+1=2$ 」「青信号は進んでよし」などであり、この能力は人間の生活に（1. 不要 2. 不可欠）である。

「脳の立場」に立ったとき、IT革命は、人々の生活に情報量を（1. 増やした 2. 減らした）。それはIT革命が（ ）の革命だったからである。IT端末に没頭しているとき、脳は（ ）状態になっており、このことが続くと、脳はやせ細り、やがて本来の機能を損傷する。損傷はときに機能の喪失にまで及ぶ。「脳の立場」に立ったとき、あくまで最大の情報源は、直接の（1. 人間 2. 言葉）である。ただしそうして情報を与えてくれるのはあくまで（1. 脳 2. 立場）の関わりがある人だけである。

営みのよこびは本来、（1. 脳のみ 2. 自意識のみ 3. 脳と自意識の両方）に発生する。このよこびが得られないとき、人は自意識に起こる（ ）をその代替に充て、それを生きる原動力にする。この方法を（ ）式という。この方式は（1. 初めは上手くいく 2. 初めから上手くいかない）。けれどもこの方式の果てにあるのは（ ）型と（ ）型である。方式の果てにそのような様相に行き着くことは、一般に（1. 警戒されている 2. 警戒されていない）。パッケージされた情報を、「無数に」「一気に」、（ ）のように流し込むことで、自意識は（ ）あげられ、自意識は（1. 鍛えられる 2. 肥え太る）。一般に勉強を（1. しっかり 2. みっちり）やるのは、自意識を（ ）的かつ（ ）にするためであり、このことがされないままに現代の文化物を与えられ続けることには相応のリスクを伴う。けれども誰もこのことに巻き込まれる前提で考えねばならない。

自意識の時代影響に侵された人間は、（ ）専門人として新しく現代に生まれてきている。彼らの特徴は第一に「（1. 心 2. 頭）が弱い」ところにある。その結果、脳で全体的脈絡を（1. 理解する 2. 発見する）ことができず、（1. 問題が問題だと 2. ニセモノがニセモノだと）わからない。そうならないためには結局、（1. 全体的情報 2. 専門的情報）を（ ）に（1. 勉強して 2. 浴びて）ゆくしかない。

自意識は（1. 行為 2. はたらき）をし、脳は（1. 行為 2. はたらき）を持つ。そのぶん、時代が自意識化すると、多くのものが（1. 合理的に 2. わざとらしく）なる。いわゆる（1. かつこいい 2. かつこつけ）が礼賛されるようになるが、それでも、人が本当によこびを得られるのは（1. 利得があつて 2. 脳がワットとなって）起こる営みに触れられたときのみである。

◆問2. 脳の知識と自意識の知識とで、明らかな差が表れる例を3つ述べなさい。

◆問3. 以下の空欄を埋め、選択肢は正しいものを選びなさい。

自意識は常に「現在」を（1. 捉えている 2. 捉えていない）。数直線上のゼロ点に自意識による「認識」の時点を置いたならば、「現在」の時点は数直線上で（1. ゼロ点 2. -1の点）である。脳は現在を捉えることができるので、脳は自意識に対し（1. 同調 2. 先行）している。このとき自意識というのは、起こる振る舞いを確認する（ ）装置にすぎない。

脳には、（ ）が見える。それにより、人はその関わりにおいては、（ ）いく・（ ）こさせる、ということができる。

コミュニケーションは行為（1. である 2. ではない）。（1. 脳と脳 2. 脳と自意識）の関わりが健全に起こらないかぎり、人々の営みはよろこびの魅力を失っていく。これは脳のことであるので、身体を伴った関わりについて（1. 深く影響を及ぼす 2. 影響を持たない）。人がコミュニケーションの中で「受け答え」を活発にするとき、互いの脳は呼応（1. している 2. していない）。

人と人との間で、自意識による営みは正当に（1. ある 2. 無い）。こちらの営みは根本的に（ ）ものであり、コミュニケーションにこれを転用するならば、それは（1. 食事をひとつまみずつ楽しむ 2. 食事をひとつまみずつ運ぶ）ようなものだ。

◆問4. 以下の各文の正誤を、○と×をつけて示しなさい。

1. 人はいわゆる「リア充」になってはいけない。
2. 時代はどうあれ、たくさんの人と付き合ってゆけば大丈夫である。
3. インターネットが便利になったので、たくさん作品を楽しむ機会が増した。
4. 自意識でなく、無意識に起こることこそ大事にすべきである。
5. 「好きなタイプ」はよく脳のことを表している。
6. 脈絡の整っていない会話は自意識にとって負担になる。
7. IT技術に生活上の影響が薄い層は過去の健全さのままにされる。
8. 陶酔などは早くに超越するべきである。
9. 脈絡を持たない同士だと人は衝突してしまう。
10. 自意識の握力は頑強であるべきだ。
11. 自意識の機能と脳の機能は対立する。
12. 何事につけ「わざとらしく」ならないように意識するべきである。
13. 好きな人の前で緊張してしまうのは脳がワットなるからだ。
14. 人についてのたくさんの情報を統合することがコミュニケーションである。
15. 自意識は自分のものである。
16. よく調べたものしかよく知っているとは言えない。
17. 「いい人」は誰にだってわかるものだ。
18. 自意識の肥大は脳機能を激しく抑制する

<解答>

◆問1. 以下の空欄を正しく埋め、選択肢は正しいものを選びなさい。

現代は（脳）が弱り、代わって（自意識）が発達する時代である。前者の機能は（1. 全体的情報）を処理し、後者の機能は（パケット）情報を処理する。後者はまた、表面的な（脈絡）をのみ追跡・検査する。その代表は「 $1 + 1 = 2$ 」「青信号は進んでよし」などであり、この能力は人間の生活に（2. 不可欠）である。

「脳の立場」に立ったとき、IT革命は、人々の生活に情報量を（2. 減らした）。それはIT革命が（情報数）の革命だったからである。IT端末に没頭しているとき、脳は（飢餓）状態になっており、このことが続くと、脳はやせ細り、やがて本来の機能を損傷する。損傷はときに機能の喪失にまで及ぶ。「脳の立場」に立ったとき、あくまで最大の情報源は、直接の（1. 人間）である。ただしそうして情報を与えてくれるのはあくまで（1. 脳）の関わりがある人だけである。

営みのよろこびは本来、（1. 脳のみ）に発生する。このよろこびが得られないとき、人は自意識に起こる（陶酔）をその代替に充て、それを生きる原動力にする。この方法を（陶酔）式という。この方式は（1. 初めは上手くいく）。けれどもこの方式の果てにあるのは（麻痺）型と（決壊）型である。方式の果てにそのような様相に行き着くことは、一般に（2. 警戒されていない）。パケタイズされた情報を、「無数に」「一気に」、（ジュース）のように流し込むことで、自意識は（こすり）あげられ、自意識は（2. 肥え太る）。一般に勉強を（2. みっちり）やるのは、自意識を（合理的）かつ（頑強）にするためであり、このことがされないままに現代の文化物を与えられ続けることには相応のリスクを伴う。けれども誰もこのことに巻き込まれる前提で考えねばならない。

自意識の時代影響に侵された人間は、（パケット）専門人として新しく現代に生まれてきている。彼らの特徴は第一に「（2. 頭）が弱い」ところにある。その結果、脳で全体的脈絡を（2. 発見する）ことができず、（2. ニセモノがニセモノだと）わからない。そうならないためには結局、（1. 全体的情報）を（心身）に（2. 浴びて）ゆくしかない。

自意識は（1. 行為）をし、脳は（2. はたらき）を持つ。そのぶん、時代が自意識化すると、多くのものが（2. わざとらしく）なる。いわゆる（2. かつこつけ）が礼賛されるようになるが、それでも、人が本当によろこびを得られるのは（2. 脳がワットなって）起こる営みに触れられたときのみである。

◆問2. 脳の知識と自意識の知識とで、明らかな差が表れる例を3つ述べなさい。

- ・人間の手とマネキンの手を感触によってただちに見分けること
 - ・魚屋がスルメイカとケンサキイカを分析なしに見分けること
 - ・我々が標準語と大阪弁を完全に聞き分けてしまうこと
- など。

◆問3. 以下の空欄を埋め、選択肢は正しいものを選びなさい。

自意識は常に「現在」を（2. 捉えていない）。数直線上のゼロ点に自意識による「認識」の時点を置いたならば、「現在」の時点は数直線上で（2. -1 の点）である。脳は現在を捉えることができるので、脳は自意識に対し（2. 先行）している。このとき自意識というのは、起こる振る舞いを確認する（モニター）装置にすぎない。

脳には、（脳）が見える。それにより、人はその関わりにおいては、（ついて）いく・（ついて）こさせる、とすることができる。

コミュニケーションは行為（2. ではない）。（1. 脳と脳）の関わりが健全に起こらないかぎり、人々の営みはよるこびの魅力を失っていく。これは脳のことであるので、身体を伴った関わりについて（1. 深く影響を及ぼす）。人がコミュニケーションの中で「受け答え」を活発にすると、互いの脳は呼応（2. していない）。

人と人との間で、自意識による営みは正当に（1. ある）。こちらの営みは根本的に（しんどい）ものであり、コミュニケーションにこれを転用するならば、それは（2. 食事をひとつまみずつ運ぶ）ようなものだ。

◆問4. 以下の各文の正誤を、○と×をつけて示しなさい。

- × 1. 人はいわゆる「リア充」になってはいけない。（→脳の営みがあればよいだけで、形式は問題ではない）
- × 2. 時代はどうあれ、たくさんの人と付き合ってゆけば大丈夫である。（→すでに多くの人が陶酔式を採用しており、各人が対抗を持たねばならない）
- 3. インターネットが便利になったので、たくさん作品を楽しめる機会が増した。（→作品は「体験」を与える）
- × 4. 自意識でなく、無意識に起こることこそ大事にすべきである。（→自意識の行為は「習慣」になりいわゆる「無意識」の行為になっていく）
- × 5. 「好きなタイプ」はよく脳のことを表している。（→「タイプ」等、分類化はパッケージ情報である）
- 6. 脈絡の整っていない会話は自意識にとって負担になる。（→脳で処理すべき全体を自意識で追えば負担になる）
- × 7. IT技術に生活上の影響が薄い層は過去の健全さのままにされる。（→娯楽メディアを含めた全体がパケット人間界化を進めているので巻き込まれる）
- × 8. 陶酔などは早くに超越すべきである。（→耽美・貴族法による陶酔のひとつに「超越ふう」がある）
- × 9. 脈絡を持たない同士だと人は衝突してしまう。（→それぞれの脈絡が正しいので、譲れなくて衝突する。例、法廷や議論など）
- 10. 自意識の握力は頑強であるべきだ。（→銃撃戦中の兵士が指示を誤ってはいけない）
- × 11. 自意識の機能と脳の機能は対立する。（→脳は自意識に先行し、対立ではなく時間差ある並列で機能する）
- × 12. 何事につけ「わざとらしく」ならないように意識するべきである。（→「意識する」ということは「わざと」である）
- × 13. 好きな人の前で緊張してしまうのは脳がワツとなるからだ。（→乳幼児は緊張しない。振る舞いが「認識」に引きずられることで緊張が起こる）
- × 14. 人についてのたくさんの情報を統合することがコミュニケーションである。（→パッケージされた情報はついに統合されない。一つの全体的情報にはならない）
- 15. 自意識は自分のものである。（→脳は生来所有だが自意識は後天的構築である）
- × 16. よく調べたものしかよく知っているとはいえない。（→ガイドブックの情報より地元の少年のほうがよく知っている、脳の知識として）
- × 17. 「本当にいい人」は誰にだってわかるものだ。（→パケット専門人は表面的脈絡の「いい人」しか理解できない）
- 18. 自意識の肥大は脳機能を激しく抑制する。（→自意識は脳の先行機能を「禁則」にすることができる）

最終講

われわれはどうすればよいか

長

い講義を、お疲れ様でした。あえて設けたこの「最終講」は、講義らしい内容をもたせていません。講義を終えての、ディスカッションのようなものと捉えてください。新しくお話しすることはありません。ですがある意味ではこのことが最も大切なわけではありません。直接的に……「われわれはどうすればよいか」。ここまでの講義は、この「どうすればよいか」という、決断を下すのに、必要な材料を与えてきたに過ぎないでしょう。

脳だの自意識だのといって、結局何も変わらなかったならば、それはそれで、その人のひとつの選択です。それをどうこう申し上げるのは、すでに講義と受講という仕組みから逸脱するでしょう。ですが僕ももう講義をするつもりはないので、一人の対等な個人にシフトしながら申し上げております。あなたは、あなたの出会う人々にとって、「すごい、脳の人だ」と受け取られるように、実際なるのかどうか。ならないのではあまり意味がありません。そして、「ゆくゆくは」というような言い方をするのは、僕は好きではありません。「ゆくゆくは」というのは、つまるところ、今日も明日も何もしないでゆくという宣言です。結局何もしないでいくというのは、別に悪いことではない、人それぞれに尽きることだと思いますが、そこにわざとらしい工夫をした言い方をするのは、本当は誰にとっても美しいことではないはずですよ。

お話ししておくべきことが一点あります。それは、ここまで「脳と自意識」という話を、対比的にしてきましたが、これだって、もともとは一つの全体であるものを、やむをえず、分化して説明に充てたに過ぎません。脳の機能と自意識の機能がありますが、その両方があるのが人間です。そもそも「両方」でもなくて、全体としての「機能」があるのを、わざわざ分けて捉えただけでした。物事を説明するというのはそういう行為ですし、具合の悪い現状を"外科手術"するというのは、そうして区別的に取り扱うよりしょうがないのでした。ですがそのこと自体、全体的情報を直接取り扱う脳の機能から見れば、それぞれにパッケージ・分離して捉えるようなことではありません。「膝とくるぶし」というと分かれて聞こえますが、「足」といえば全体が足です。「この動作をするときは膝が先行しますよ」ということがあったって、それはわざわざ分けて捉えるから「先行」が出てくるのであって、全体としてみれば何が先行も追従もありません。

講義ですので、説明するに決まっていますし、説明するからには、そうした分化が必要でした。ですが、それが分化されたままでは、「よく理解されている」ということにはなりえても、「完成している」ということには決して到達しません。むしろ遠ざかるばかりになります。講義がここで修了されて、もしこの「先」がそれぞれにあるとすれば、それはそれぞれが理解ではなく「完成」にまっすぐ向かうということではないでしょうか。

われわれはどうすればよいのでしょうか。あきらかなことはいくつかあります。心身に全体的情報を浴びることであり、「ついていく」「ついてこさせる」というようなことを、求め、また自分に課すことです。のんきな受け答えや脈絡など通用しないような何かを体験し、その体験を積み上げて、脳を鍛えていくことです。そこによるこびは必ずあります。

むしろ本当に困難なことは、そうして表面上の形式をどう整えても、結局そこに自意識しかなかったら、すべてがただわざとらしいだけだった、全てが冗談じみた、何の足しにもならない無駄だった、ということになってしまうということです。「脳をトレーニングしましょう」という会合があったとします。が、その中で、自意識の持ちこみをどうやって禁止などできるのでしょうか。どのように形式を工夫したって、そこで当人が脳を使うか自意識を使うかは、結局当人の決めることでしかありません。まして、当人が、「自意識をやめたい」と言ったって、その思念は自意識の思念なのですから、禁止といったって当人にさえそれがで

きない。どういう「行為」をすればよいか？ といって、「行為」というのは全て自意識なのでした。

脳には「はたらき」しかないのであって、この「はたらき」を回復させ、鍛え、引きずり出すしかないのです。それについて何が必要かといえば、強いて言えば、ということになるでしょうが、何かしら徹底した「覚悟」だと思えます。自分の自意識などはまったくクソクラエなのだという覚悟、何の役にも立たないのだという覚悟です。この覚悟には、思いがけず勇気が要るものだと思います。これまでに持ったことのないような踏み切った勇気が。そして勇気から覚悟に到達し、その先で、人は脳の「体験」を得ることができると思えます。

このことが、役に立つかどうかはともかくとして、ひとつひとつ、考えてみましょう。さしあたり、このテキスト上でできることはそれしかありませんから。

「脳」の人」に直接付き合い合わせてもらう、ただし……

寝床に横になってモンモンと考え、それで解決するなら苦労はしません。覚悟が練りあがるまではそういう時間もあるかもしれませんが、結局のところ「人」です。まったく現実的に考える限り、あなたはそういう「脳の人」と出会い、直接に付き合い合わせてもらって、とにかく「次元が違う」ということを、もう物理的のように体験するしかありません。もしそのように、あなたが体験することを与えてくれる人がいてくれたら、それはあなたにとってかけがえのない幸運であり、幸福です。誰もあなたにそんなことをして差し上げる「義理」を持っているわけではありませんので、あなたはその幸運と温情をありがたく思うしかないでしょう。そのところにあなたの精神的な「手抜き」があったならば、あなたに真剣に付き合ってくれる人は誰もいないと思います。それは単純に言って当然のことです。なお「次元が違う」というのは抽象的な言い方ではなく、「先行」から振る舞いが起こっているのだから、彼の振る舞いは実際に時間軸上で「次元」が違うのでした。あなたはそれを、「心身に受け止める」かぎり、その人に圧倒されずにいられます。圧倒されるのがいやな人はうまく逃げ口をつくるでしょう。

あなたは、部屋を飛び出し、家を飛び出して、学校や会社やクラブ・サークルといった、共同体の垣根も飛び出して、群れでいるから強気になれるだけという悪習を軽蔑して断ち、ただ自分として、誰か「脳の人」を見つけて、呼びかけ、付き合いもらえるように、堂々頼みこみ、お願いするしかありません。これも当たり前のことです。居心地のいいところにいつもどおりずんぐり座り込んでいて、何かが与えられるわけがありません。あなたがその居心地のいい常識の中に住み続けるならば、それはあなたが獲得について結局本気でないということです。「みんながそうしている」ように、あなたもそこに居続けるだけなら、みんなが結局与えられない程度に、あなたにも与えられないというだけです。それは悪いことではありませんが、獲得に動かずに、自覚としては「獲得に本気」のつもりでは、単純に言って自覚と実情がちぐはぐです。共同体や、家族や友人を、捨てるということではありません。ただそういったしきたりや習慣は脳のことには関係ないということです。

脳と脳とで人が出会うとき、それがクラスメートだの知り合いだのということは何ら関係ありません。あなたは100曲のバンド演奏をCDで聴いて、「この音はわたしの知人だ」とわかるようなことがありますか。わからないはずですが。前もってそう教えられていない限りは。ですが、その中に名演奏者の演奏が入っていれば、「この音は何者かの音だ」と気づかなくてはなりません。そこに例えばパディ・リッチのドラム演奏が入っていれば、あなたの脳は気づかなくてはならない。あなたの脳に何か「見えて」、あなたは出会わなくてはなりません。そのときあなたは、脳と脳とで出会うということに、それが知人だの友人だのということは一切関係ないということを経験されるでしょう。脳は知人の演奏を「見えない」と言っていま

す。

バディ・リッチという演奏者を知らなければ、ここで検索して調べるのもやめてください。いつかのとき、本当にドラム演奏に突き当たって、「すごい！」と感じた、耳から脳がそこに何かを「見た」、そしてその演奏者を調べてみたらバディ・リッチと書いてあったという、そういう体験が、この先のあなたにあるかもしれないのですから。そのときになって、「ああ、これがバディ・リッチなのか」と体験されれば、その体験はあなたにとって貴重な体験になるはずです。全てを通して、それはあなたの「思い出」にまでなるかもしれない。

あなた自身動き出し、共同体風土で仲良しじみていくという、手馴れたことをせず、ただ一対一で誰かと出会うべきです。「脳の人」を見つけてください。そしてなんとしても、直接の時間、付き合ってもら。それはたぶん、もう単純に「お願いしたおす」しかないと思います。そしてそういうお願い事をするからには、女性のほうが有利ですし、なんといっても、若いうちのほうが有利です。若い人が若さゆえにお願い事をするのは自然なことですし、一般によく容認されていることです。これが若さを失ってからだ、「お願いしたおす」ということのより厳しい覚悟が必要になります。必要とされる「運」も、さらに大きくなってしまおうでしょう。

そうして、「脳の人」を見つけ、直接の時間、付き合ってもら。ただし……

ただし、その体験を、「納得」して持ち帰ってはいけません。「納得」というのはもっとも"おぞましい"ものだとあなたは捉えているべきです。冗談でもなく、誇張でもなく。

「納得」というのは、自意識が脈絡を整理した、ということです。それで一息ついた感じになるのは、脳のほうがまた停止したからに過ぎません。これでは何も体験したことにならないのです。せっかくの体験を自分でキャンセルして返品するような行為です。何が残ったかという、またひとつ自意識が膨らんだだけでした。

「納得」というのが、おぞましいだけのものだということを、あなたは実にご存知です。人が「納得」するだけというときの、醜い顔をよく想像に描いてください。あなたのことをさんざん傷つけた男がいたと仮定しましょう。その男は、「ふーん、傷つくんだ。納得納得」と、帰って行って、その納得をSNSの日記で「納得したこと」などという題で書いて遊んでいます。それが"おぞましい"ということはあるあなたによく理解されるでしょう。

それ以上その男を問い詰めたって、「納得以外に何ができるって言うんだよ」としか言いません。彼には自意識しかないのです、彼の機能は自意識の機能しか残っていない。それがどうしたという話ですが、あなたはそうようになってはいけません。

「つ

いてゆき」、叱ってもら、ただし……

あなたが「脳の人」に出会ったならば、その人は表面的な脈絡を超えているはず。あなたはそれに「ついていく」ということを、なんとかしなくてはならない。ただし……

ただし、「ついていく」というのは、受け答えをすることではありません。彼のほうがもともと脈絡を超えているのに、あなたがそこに脈絡で口を挟むというのは、なんと横着なことでしょう。

できればそこで、「なに口答えしてんだ」「いちいち眠たいこと挟んでくるな」と、はっきり叱ってもらえるほうがよいです。あなたはそれでショックを受け、いわゆる「傷ついた」と感じるかもしれませんが、彼との関係が清潔でありえたならば、その「傷ついた」うんぬんのことも、やはり「それ眠たいってば」と叱ってもらえます。あなたはそのとき、彼のことを信じて、なんとかして「ついていく」ということをしな

くてはならない。「傷ついた」というのは、油断していた自意識がきつい「焼けつき」を起こしたということですから、振る舞いが自意識よりも先行しているうちは、その「傷つく」ということは起こらないのです。彼があなたに「眠たい」というのは、あなたの全てが「現在」という時間から出遅れているからです。「口答え」というのも、彼はあなたに「話すな」と言っているのではない。その口答えがもう出遅れている自意識からの振る舞いだから、それを振り落とそうとしているのです。

こんにちの教育では、人はとにかく対等であるべきで、上から目線はとにかくいけない、とにかく人に気を遣うべきだ、と教え込まれています。その結果、人が人に「叱りつける」というようなことは、もはや無条件で否定されています。だから、もうその叱りつけるなどということ自体が、天然記念物のように珍しい有様なのですが、現実問題としてはきっと、人はそうして叱られる機会を得ないと、自意識に膠着した次元を超えることができません。自意識の表れを、ただ「眠い」「遅い」「口答え」と叱りつけてもらえることで、やがて自意識に頼ることをそもそもやめ、脳で直接コミュニケーションしようとするようになるものです。その意味では、脳の人に叱ってもらえないというのは、地獄行きを決定づけられる「猛烈な不幸」だと捉えてかまいません。ただ、人が実際にそちらを選択することについて、やはりそれが悪いということではないのです。その「猛烈な不幸」でも構わないから、とにかく自分は対等に扱ってもらおう、という選択も、人によってはありえるわけですから。

とはいえ、現実的に考えるかぎり、おそらくそうして「脳の人」に叱られ、教わるということなしには、誰も脳の人にはなれません。不可能と言ってよいでしょう。もしそれが突破できる例外がいたら、その人にはたまたまそれだけ強烈な才能があったということになります。ですがあくまで、才能の持ち主は例外的な話でしょう。



心 身に浴びること、ただし……

「現代と恋愛」でいうなら、ときに、「彼氏とは絶対にセックスしなくてははいけませんか」「セックスなしでは男女はわかりあえませんか」と訊かれることがあります。僕はそれについて、「わかりあうことは出来るけれど、それをセックスなしですというのは、セックスありでやるよりも、はるかに難しい」と答えています。例え話でいうと、「盤面なしでも将棋はできる、7六歩とか8四歩とか口頭で言い合うだけで。でもそれは盤面ありで将棋をするよりはるかに難しい。ただ、達人ならできるので、不可能とは言わない、できるよ」と。もちろん男女でなければセックスはしないので、理屈の上ではセックスと人間の相互理解は関係ないように思えるのですが、それは性機能まで含んだその人間の全体性を理解することにはなりません。サッカー選手同士がサッカーをせずに——必死で意識的にそれを禁じて——分かり合おうとするようなものです。それはそれで悪いことではありませんが、せつかくサッカー選手であることの値打ちがありません。不自然にもなります。また、中にはどうしても自身の性機能が受け止めきれず、去勢して物理的にその機能を除去する人もいます。セックスという現象そのものを消去してしまえば確かに解決はするわけです。（それが残酷な自己否定や人間否定にならないと信じられる限りにおいては）

脳は人についての全体的情報を処理します。そのためには、全体的情報を「心身に浴びる」ように体験しなくてははいけません。履歴書をどれだけ細かに読んでも誰かのことを「わかる」「知る」ということにはならない。一日に送りあうメールの"数"を義務付けたって同じです。だから男女の恋仲ではセックスが、互いにその「心身を浴びせあう」ということに大きな役割を担っており、ひいては、そのことなしにお互いを伝え合う・わかりあうのはより難しくなるということなのでした。

あなたは脳の人と出会い、その人の声や肉体や言葉や表情を、心身に浴びるべきです。そうすることのみ

で、あなたの脳は彼のことを「知る」ことができ（脳の知識）、またひいては人間のことや、男性のことも知ることができます。脳はますます鍛えられてもいく。ただし……

ただし、一般にコミュニケーションという第一に会話ですが、今申し上げたとおり、会話というのは余計に難しいのです。それは会話に使う「言語」というものが、あまりに自意識と馴染みがよすぎるからです。本当には、自意識に言語が受け止められたからといって、それにこだわることもなければ、それによって脳機能を停止させることもない、そして言葉を語りだすという振る舞い自体を、本当は脳の先行機能からスタートさせることもできるのですが……とにかく、言語会話で関係を自意識化させないのは、実はもっとも難しいことなのでした。あなたは「言葉の力」などというマヤカシを信じ込んではいけません。「脳の力」によって、言葉がつぎつぎに紡ぎ足されていく、文脈が織り成されていく、ということのほうを体験されるべきです。言葉にこだわって脳が焼けつきを起こしてカーッとするのは「言葉の力」ではありません。

彼があなたの頭を撫でながら、「この、バカめ、まったく、めちゃくちゃになってしまえ」と言い、矢継ぎ早に、「本当に心配してんだ、お前は賢いんだから、ちゃんと幸せになれよ、おれを困らせるな」と言うとき、あなたはそのいちいちにこだわったり、受け答えををしたり、してはいけません。彼は何を言おうが「彼」だ、と、変わらず脳が受け止め続けている状態を体験してください。実際彼が何語で何を言おうが彼は彼なのですし、シュビドゥバ、ヤーヤーヤ、と"スキヤット"を入れたって、彼はやはり彼です。この、脳から見て当たり前すぎることを見失わない体験をしてください。



色

んな営みに挑戦する、ただし……

人と、茶飲み話ばかりしているわけにはいかないでしょうから、恋愛も含めて、やはり何かしらの「営み」に、能動的に参加していくしか、実際にはありません。ただし……

ただし、営みの全てには「形式」があります。この「形式」というのが、恐ろしく厄介です。あなたを殺すものであり、あなたの全ての時間を水泡の無駄に帰す、その犯人がこれです。

あなたは形式に注意してください。注意しすぎるといことはありません。形式に囚われてはいけない、ということですが、どれだけそう注意していたって、あなたは生涯その形式というのから一ミリもはみ出すことができません。かなり高い可能性で、そうになってしまう、と、前もって、こう挑発的に申し上げておいて、差し支えないものです。あなたがどれだけの時間と労力をかけて、必死になったつもりでも、とどのつまりが、その形式をなぞっただけに過ぎなかったとしたら、それは全て時間の無駄です。全ての労力は水泡に帰したのです。これがもっとも恐ろしいことなのですが、事実としては、これが「最も多いパターン」でもあります。

先ほど、言語会話は余計に難しいと申し上げました。言語と自意識はあまりに馴染みがよく、言語を通しつつ関係の自意識化を避けるのはとても難しいことになる。それは言語が典型的に「形式」を伴うものだからです。言語には、主語があり述語があり、意味があり、脈絡があります。一人称や二人称があり、形容詞や副詞があり、その内容は賞賛であったり批判であったり、また言葉の記号そのもの……とにかく「形式」のかたまりです。言語の「形式」が自意識の第一機能だと言えるほどです。この「形式」は、自意識が認識することで捉えるものなので、この言語を十分に操りながら、なお脳の機能を先行させつづけるというのは、特別に難しいことになります。

そして形式といえば、言語だけでなく、全ての営みに、必ずついてまわるのです。それはセックスにさえついてまわります。こうして見つめあうだとか、こうして愛撫するものだとか、こうして感じている声を上げるだとか。演技というのとは違うのですが、形式をなぞるだけということが、実際できます。「セックス

のときは男らしく」「女らしく」「ロマンチックに」といって、その形式をなぞるだけというようなことが。そして形式をなぞっているだけのときは、自意識だけが活発に頑張っている状態で、お互いに「形式完璧だったね」ということしか残らない。それは脳の営みではありません。

だから形式というのはあなたの最大の敵なのですが、かといって、形式がまるでなしに営みというのは成り立ちません。ステップのひとつもなしにダンスは踊れないというようにです。それでたとえばダンスというもの、単にステップや動作の形式をなぞるだけの"運動"によくなります。それは脳の営みではない。そして偏った努力の方法として、「なぞるのが難しい形式」ばかり追求して、より難しい形式をなぞれるようになりました……としていっても、その挑戦は自意識の営みを強化しているだけであり、脳の営みへの挑戦にはなっていないのでした。

ここまでお話ししているように、脳の営みというのは捉えづらいものです。捉えづらいも何も自意識でそれを認識するよりも「先行」しているというのだから、話になりません。それで、自意識がすでに膨れ上がり、どうしてもその脳の営みということが得られない人は、耐え切れずにその「形式なぞり」のほうへ逃げます。自分の掛けた時間や労力が無駄になってしまうとは信じたくないものですから、難しい形式をなぞれるようになったという、実績を自分に残したがります。

でもそれは本末転倒なので、あなたはそこから逃げてはいけません。形式は必要なものですが、必要なだけで、それ自体は何でもありません。ワインを飲むにはグラスが要りますし、高級ワインには高級なグラスを当てるべきですが、それで高級グラスコレクターになっても、それではワインの滋味を一滴でも飲んだことにはなりません。グラスはワインの収まる形式でしかありませんので、満たす葡萄酒が貧相ならブーイングです。



ま

まず圧倒されるべき、ただし……

あなたは「脳の人」に出会い、まず"圧倒"されるべきです。鍛えてあるものと鍛えていないものがぶつかれば、一方が一方を"圧倒"するに決まっています。あなたがその"圧倒"されるという経験をすることがないとしたら、あなたはまだ必要な誰かに出会ったことが一度もないと言われるべきです。

あなたは"圧倒"されるべきですし、そういう人に出会い、そういう人に、自ら喰らいついていくべきです。ただし……

ただし、そのような人に出会えたからといって、その人をただ「尊敬する」であるとか、そういうことに落ち着いてはいけません。その人はみんなに尊敬されているので、今さらあなたが尊敬したからといってどうということもありません。問題はずっと、「あなたの脳がどうか」ということのみでした。

"圧倒"されるというのは、気軽な体験ではありません。それは道場で、素人が有段者と乱取りしたような状態になります。有段者の側が少々の手加減をしたとしても、ちゃんと乱取りされてしまえば、もうボロボロにされます。あなたは"圧倒"されながら、胸は苦しいし、息も苦しい、でも眼を離すこともできず、落ち着いて一息入れられるような隙間がどこにもありません。でも自分がいつか有段者になるなら、その乱取りの中で、なんとか一撃でも放り込めるように、必死で喰らいついていくしかないのでした。あなたが伸びるのは、感想を持って帰宅してからはありません。乱取りの真っ最中でのみあなたは伸びるのです。

実際そうして"圧倒"されている中、「尊敬する」なんてノンキな余裕はありません。尊敬しているのは必ず休憩中です。あなたはその苦しい"圧倒"されるという中に、できるだけ長く粘りつづけ、なんなら延長戦まで申し込むようであってください。



疲

れ果てた、さらに先の体験をする、ただし……

自意識の営みは基本的に「しんどい」と申し上げてきました。このことは逆転して利用することもできます。人はしんどさにしんどさを重ねていくと、ついにギブアップ、ハングアップする、ということが出てきます。「自意識がしんどい」のですから、そのギブアップの果てに、ついに「自意識をやめる」ということが出現する、そういうことはよくあるものです。自意識がついに完全についてこられないところまで引っ張りまわす。これは、このようにしてくれる人がいれば、その人との出会いは、あなたにとって最上の出会いでした。

「脳の人」に初めて出会い、あなたが喰らいついてゆけば、あなたはヘトヘトになります。なぜなら、まず彼の脳にあなたの脳はついていくことができません。ついていけないので、なんとか、後追いの自意識でカバーしてゆこうとするのですが、自意識でそれをするのはしんどいのでした。テニスになっていないテニスのほうが疲れるということをイメージしてください。飛んでくる球に「ついていけない」ので、落ちて転がっていったものを、いちいち拾ってから打ち返す。それを何十分も休憩なしに続けていけばどれだけしんどいか。自意識でカバーするというのは、そうして落ちた球が止まってから拾い上げている状態です。本人はそれを落ち着いて拾っているつもりでも、向こうが矢継ぎ早にガンガン打ち込んでくるなら、それが本当の落ち着きなどではないことを強制的に思い知らされます。

そうして「球拾い」をするのが、しんどすぎる、もう無理……となったとき、人はしばしば本能的に、脳でそれに「ついていく」ということを始めます。自意識を放棄して、当人は「もう無理」と、投げ出したつもりでいるのですが、そうしてヤケクソになってみたら、逆に「ついていく」ということが、実は自分の機能として出来るということに気づくのです。もちろん引き続き圧倒はされているのですが、それでも一応「テニスになっている」という程度にはできて、あなたは自分で驚きます。また、そこからなら、それは脳のはたらきですから、メキメキ上達もしてゆくのでした。

そうして人は脳の営みを手に入れることがありますし、逆に言えば、それぐらいのことはしないと、脳の営みは一切始まらないという、そういうものでもあります。

自意識の営みはしんどいものです。ですからいっそ、しんどすぎて、それが疲れ果てるどころ、それでも容赦なく営みを要求されるという体験を、あなたはしてください。ただし……

ただし、講義の中でも申し上げたとおり、自意識が「もうしんどい」となったとき、ただ「麻痺型」のほうへ行くことも少なからずあります。それはもう、この期に及んでも、脳の機能が回復しない、立ち上がってこないという状態です。テニスで言えば、もう球拾いもしないし、打ち返しもしない、テニスコートに起こっていることを全て無視する、「何も聞こえない」という状態。

どうしようもなく、この「麻痺型」になるしかない、もう回復しない、という方も、いらっしゃるのは確かです。ですが、あなたがそうでない場合は、自分が「麻痺型」に逃避するその習慣は、決して自分に許してはいけません。あなたがボロボロのヘトヘトのヘタクソになることについては、何の問題でもありませんし、あなた以外の誰も気にしていません。あなたが自分を無能に憎らしく思えたとしたら、それはあなたの自意識の責任であり、非難もあるていど事実ですが、それはあなたの脳のことでありません。"幸い"、あなたの脳はあなたが作ったものではないので、あなたのように無能で役立たずなものではありません。あなたにはあなたの脳を非難する資格は無いのでした。

「名作」と呼ばれる作品に触れる、ただし……

陶酔式の文化物は、作品というより、ただあなたの自意識をこすりあげにきて、あなたに陶酔を与えようとしします。それは駄作というより、初めからそのように企図して作られたものですから、あまり作品論に取り込んで扱うべきではありません。

それら陶酔式の文化物でない、もう十分な時間に濾過されて、なお「名作」と呼ばれている作品に、あなたは多めに触れてゆくべきです。たとえば、複数の映画をレンタルするなら、その中の一枚にそっと取り込むようにして。

名作、名曲、名演といったものの、実は多くが、今のあなたにとって、しばしば「退屈」と感じられるに違いありません。それはその名作があなたの自意識をこすりあげにこないからです。あなたは「陶酔」が得られないので、それを退屈に感じます。

クラシック音楽の、名演らしい、と、すでに評価が確定しているものがあつたとして、あなたはそれを聴いて、正直「退屈」と感じた。そういうとき、あなたにはひとつのチャンスが与えられています。決して、それを「名演なのだ」と思い込もうとしてはいけません。ただ、それが「名演」であると、脳に「見える」ことがあるのです。だからこそそれは名演だと言われている。あなたは、あなたに"その時"が来るのを待ちましょう。名画や文学作品といったものもそうです。退屈に感じられるそれを、退屈なら退屈なまま、自分の感じていることを、決して捻じ曲げてはいけません。それでは「名作だ」という認識が習慣になってしまうだけで、いつかきつと来るはずの、「見える」ということを失ってしまいますから。

チャンスというのは、あなたの脳にはまだそれが「見えない」ということです。作品はあなたに「体験」を与えるのですが、まだそれが「見えない」ので、体験は与えられません。それで退屈だと感じている。その退屈なCDの一枚の中に、どうやらあなたの、まだ未知の体験が眠っているのです。どうすれば「見える」ようになるのか、それは定かではないので、ひたすら思い込みを持つことなく、ときに虚心にそれを聴くしかありません。

その退屈な「名作」の中にある「体験」が、どのような形で、いつかあなたに与えられるか、それは一概には言えません。ずっと与えられないかもしれませんが、まったく意外なところから与えられたり、あるいは十数年の年月が経ってから、ようやく与えられることもあります。あるいは与えられたと思っていたものが、何十年も経ってから、まったくそうではなかったと、本当の体験を新しくすることもある。

よくある例で言えば、たとえばあなたは、その名演のクラシックを「退屈だ」と聴いたとします。それ以上のことではなかったのですが、あるときクラシック音楽のコンサートに連れて行かれると、その演奏を聴いていて、何か無性に「腹が立ってきた」と感じます。何に腹が立つのかわかりませんが。

そしてあなたは、「あのCDには、ひょっとして、そういう腹の立つところがなかったのでは？」と気がつきます。そして押入れをごそごそやって、そのCDを取り出してくる。そして聴いてみると、「あ」となります。何が違うとはいえなくても、「まるで違う」と。同じ曲目なのに「まるで違う」と聴き取られます。「腹が立った」という体験が重なっていますので、その聴き取りは過去よりも鮮やかに聴こえます。そしてふと、「こうして退屈なものが、ひたすら奏でられているのに、腹が立たない……そうか、これは"美しい"んだ」と気づきます。それに気づいたとき、あなたはきつと、静かながら、愕然としていると思います。

たとえばそのようにして「体験」が得られることがあります。そのような体験を得たとき、すでに、それが一般に名演であるかどうかなどは、どうでもよいことになっています。何しろ自分の「体験」のことです。それが世間一般にどうであるとかは、自分には関係のないことですから。

ただし……

ただしあなたは、それから「よし名作を漁ろう」として、「名作に詳しい人」「名作マニア」「名作評論

家」になってはいけません。詳しいとかマニアとか評論家とかいうのは、パケット情報を多く持つ人であり、そのことに「体験」を持つ人ではありません。名作を消化するリストを作り、その鑑賞のいちいちにメモを取っていく、というようなことは、きつとしないほうが、最終的にあなたを助けます。

余談ですが、僕はスコッチが好きでよく飲み、百以上もある銘柄のうち、飲んだことのないものはもうほとんどなく、ボトルを見ただけでおよそすべての見当はつくのですが、それでも、自分の飲んだスコッチをメモや写真に取っていくということを、僕はしません。それは僕はバーテンダーではないからです。パケット情報を多く持つ必要はありません。メモなどしなくても、どうせ忘れられない一滴は、舌から脳へ刻まれてずっと残っています。いろんなスコッチのラベルが思い出になって……ちょっとお話しできないようなたくさんのことにつながっています。



遅

さを叩きのめされる、ただし……

いわゆる「いい人」は、おそらく、あなたが何かを話したのを、ゆっくり待ってくれるでしょう。あなたが動き出すのを、ゆっくりでいいよ、と、待って構えてくれると思います。それは「やさしい人」としてあなたの気持ちを癒すかもしれませんが、実はそのことを続けていると、いつまで経ってもあなたの脳は営みを始めません。それは彼があなたが自意識から「エッチラオッチラ」動き出すのを、善良にも待ってくれるからです。

脳と自意識の決定的な差は、その時間軸上の位置です。自意識の「認識」をゼロの点と取れば、脳は「現在」を捉えていて、その位置は-1の点です。あなたが自意識のゼロ点から出発するかぎり、あなたの全ては全てのこと「間に合っていない」ことになります。

あなた自身が「脳の人」となり、脳の営みを回復するためには、思い切って、そのところの「遅さ」を、叩きつぶされるほうがよいのです。それも「執拗」に。それは、脳が機能しはじめるまで、とんでもないストレスになるかもしれませんが。

自意識の全ては「遅い」のでした。あなたはあなた自身でも、自分の全てについて、まず「遅い」と、叩き潰してやるのがよい。ただし……

ただし、遅いといっても、それは「スロー」ではなく「ディレイ」です。「出遅れている」という遅さです。「遅い」と言われて、あなたは気が急いたり「焦ったり」する必要はありません。焦るというのは特に間違いです。焦るというのは出遅れているから焦るのです。先に出たものが焦ることはありません。あなたは「ファースト」を心がけるのではなく「フライング」を心がけてください。自意識がトリガーを引くまえに動きだしてしまっただけです。

脳からみれば、自意識の側はディレイであり、自意識からの振る舞いは、脳からは「今かよ！」と呆れて見えています。

自意識は脳に比べて遅く、出遅れるのですが、そのぶん安全です。確認してから出るので安全性は確保されるわけです。あなたはこのことをよくよく見て、「危険が無いなら出遅れている」「安全・安心なら出遅れている」とも確認してください。

わ

けのわからないことをする、ただし……

あなたはきっと、わけのわからないようなことを、言う人ではありませんし、する人でもありません。ために僕がわけのわからないことを言しましょう。「ペペロンチーノは水道水、アメリカは時間が行く、サルサ！」。このとおり、わけがわかりません。

ではあなたに、わけのわからないことを言ってもらいたいと思います。……と、僕はこのことを、実際によくお願いするのですが、この「わけのわからないことを言う」というのを、理屈ではわかっても、実際にできない人が多いです。ものすごく多い。

なぜこんなことができないわけがあるのでしょうか。「エネルギーッシュ、ストンピング、ホールド！ イナフ！」。こんなこと世界で一番簡単なはずです。

が、実際には出来ないのです。「そりゃ出来るよ」「出来るに決まっている」と、思い込んでいるだけで、ひとりでこっそりなら呟くことができたとしても、目の前で「わけのわからないことを言って」と言われると、本当に人は、このことができません。

ちなみに、僕がこのことを知ったのも、最近で、「ふつう出来ないことなんだ」と知らされて、僕は心底びっくりしたのですが……僕は生まれてこの方こんなことに難しさを覚えたことがないものですから。僕はやれと言われたら無限にできます。本来、当たり前のことですが。

改めて申し上げますと、この「わけのわからないことを言う」ということには、実は一種のコツがあります。自意識の媒介する前に言葉を選んでしまうことです。とにかく言うてしまうことです。別に何の言葉でもよいでしょう？ いちいち立ち止まらず、いちいち、結果や査定を求めたりせず……

自意識が媒介すると、自意識は脈絡の機能にこだわりますので、わけのわからないことが言えなくなります。少しコツをお教えますと、どうしてもできないという人は、両手をぐるぐる、無意味にデタラメに振り回してみてください。振り回しながらトライしてみる。そうすると、少し糸口が掴めるかもしれない。

「わけがわからない」というのは、案外重要なことです。「わけがわかってしまう」というのは、すでに自意識がその認識を終えたということですから。「わけがわからない」というのは、その認識が終わってしまう前に、ということになります。

このことが、意外に出来ない人が多いというのは、認識が終わってしまう前に動くという体験があまりに無さ過ぎるからだと思います。

あなたはわけのわからないことを言うべきですし、するべきです。自意識がその「わけがわかってしまう」を完了させてしまう前に。そのことを続けていたら、わけのわからない人になるか……というと、そうでもありません。なぜなら、あなたの自意識が監督しなくても、脳の側が成長して、脳なりに全体的な脈絡を持った何かを言うようになりますし、何かをするようになるからです。実際に、自分の脳が勝手にそれをするのを、自意識が遅れて眺め、自意識が「へえ」と"感心"することさえ、少なからずあるのです。

あなたはそうにして、脳の側にはたらかせ、脳を鍛えていくべきですが、ただし……

ただし、「わけがわからない」といって、残念ながらしばしば見かける、単に奇抜なだけの人、単に珍妙なだけの人になってしまっはいけません。そういうのは、「よし奇抜だ」「これは珍しいもののはずだ」と、十分認識してから動いています。ですから脳のはたらきが現れているわけではないのです。

そして、「わけがわからない」といって、それは「脳にも見えていない」わけではありません。脳には見えているが、自意識が認識する前に動いているというだけです。もし、自意識にも脳にも把握されていない、ひたすらのメチャクチャが良いというのであれば、言い方は気が引けますが、認知症の支離滅裂でもよいのではないのでしょうか。

「わけのわからないこと」というのは、感情的に破裂したものでなければ、ポカーンと呆けたものでも

ありません。それが何であるかは脳にはハッキリ見えているものです。それは焦りや気ぜわしさのない穏やかな遊びの営みです。あなたに"余裕がなく"、"落ち着いておらず"、"気持ちが激しい"というときは、あなたは脳の営みなどしていないのだと、覚えておいてください。



許

しあわれる空間を持つ、ただし……

脳の営みは、自意識の営みに比べて、「わけがわからない」という時点から振る舞いを起こし、そのぶん、危険を伴うものです。ですからそれは、商用の会議室などでは出現してよい振る舞いではありません。商用の場ではそのようなことは一般に許されていません。

ですから、言い換えてみれば、あなたにはそのような脳の営みが（またそのトライアルが）、許しあわれる場が必要です。その中で、わけのわからないだけでなく、チョンボや未熟も出るでしょうから、それはきっちり叱られるものの、全体として許しあわれているという空間が要るのです。あなたはその中で脳を鍛えることができますし、脳の営みを持つということ自体を体験できます。ただし……

ただし、許しあわれる空間というのは、その中で自意識でノロノロやっていることを、「まあいいじゃないか」「頑張ってるもの」と、大目に見る空間ということではありません。それは許すところがずれていきます。許しあわれるというのは、「ノロマめ」と言いあっても、そのことにいちいち目くじらを立てない、傷ついたりしない、という空間です。「許しあわれて」いるのであれば、ノロマめ、と言うことぐらい許されねば、それは許しあっているとはとても言えません。

あなたが、脳の人を見つけ、出会うだけでなく、もしその「集団」を見つけ、その中に飛び込んで、"圧倒"されつつ「ノロマめ」と言われ、それでも喰らいついて汗を流してゆけるのならば、それはあなたにとって最大の幸福です。あなたの一生を作るかけがえのない土台の場所になるでしょう。



利

得を諦めること、ただし……

人を傷つけないという心がけは立派です。立派で、善良に思えます。が、どうでしょう。もし心無い一言をこぼしてしまい、傷つけてしまったのなら、その瞬間、死ぬ気で謝れば済むことではないですか？ 確かに、言ってしまったら取り返しのつかないことがあります。が、そんな一言は、生涯にそう多く出現しないものです。言ってしまった瞬間ごとに、本気で頭を下げて、心の底から詫げる、そうすることでなお「取り返しがつかない」などということは、そうしょっちゅうあるでしょうか。

「人を傷つけない」は、多くの場合、単に「失敗したくない」というだけのことを、自分に美化しているだけであたりします。そのことの是非はどうでもよいですが、いちいちについて、「これは人を傷つけるのではないだろうか」「悪く思われたいだろうか」「空気を読んでいないのではないだろうか」と、認識して確かめているようでは、いつまでたっても脳の営みなどできません。安全・安心であれば脳の営みではないということ、危険が無いなら脳の営みではないというのはこのことです。

もちろん、まだ鍛えられていない脳では、自意識の確認チェックをしないまま素通りさせると、とんでもないチョンボもすることがあります。ですが、それは脳の鍛錬が未熟で、やってしまった失敗なので、その途端、頭をがつつり下げってお詫びすればよいだけです。自分の未熟で失敗したものは自分で詫げるしかあり

ません。そしてその失敗があるからといって、脳を引っ込めては元の木阿弥ですし、そんなことを繰り返していたら、いつまでたってもその鍛錬が得られません。またそうして誠心誠意で詫びれば事が済むように、根本的に許しあわれている空間が必要だということなのでした。許しあわれていない空間に飛び込むのは、十分な鍛錬を経てからになります。

「人を傷つけない」うんぬんも含めて。あなたは"利得を捨てる"という決断をしなくてはなりません。悪く思われたくないであるとか、恥を掻きたくないであるとか。それらは全て、自分にとっての利得を勘案しているものです。この利得にこだわるならば、振る舞いの全ては自意識で入念に確認させてからスタートさせるべきです。商用の見積書を何度もチェックしてから発送することのように。

あなたは利得を捨てねばなりません。これは後になって、あなたも知られることだと思いますが、利得が本当に必要ないのであれば、自意識の出番はないのです。自意識というのは必ず、何かしらの「都合」のためにでしゃばるものに過ぎませんから。ただし……

ただし、"利得を捨てる"というのは、これ自体が、価値観的に美しいもののように聞こえてしまいます。ですが、これを美しいと感じ、喜んでしまっているようでは、このこと自体が利得になってしまい、本末転倒です。"利得を捨てる"というのはつまり、「自分はクソでかまわない」ということです。「かまわない」ということは、構わない、ということですから、クソであることにこだわるというわけでもない。クソであってなくても、かまわない、ということ。かまっていられない、と言えばよいでしょうか。

脳と自意識の、時間軸上の位置を見れば、そういった「利得」や「クソ」も、「置き去りにする」という感覚が正しいと言えます。置き去りにするというのは、まったく「構わずにいく」ということになりますね。



イメージ

イメージを持たない、ただし……

「イメージ」という語についてお話しします。「イメージ」というのは、自意識の機能によって起こるものです。脳の機能ではありません。このことは最も誤解されています。何度でも申し上げておこうと思います。「イメージというのは自意識の機能」です。

たとえばこう申し上げてみましょう。「パリ」「ロンドン」「ローマ」「ニューヨーク」「上海」、こう言ってみたとき、あなたはそれぞれの、すでに豊富な「イメージ」を持っているではありませんか。たとえそこに行ったことがなかったとしても。

行ったことはなくても、映像で見たことがあるから……と、あなたは言われるかもしれない。では、あなたが生まれ育った町であるとか、今暮らしている町であるとかはどうでしょうか。きっとそこには「イメージ」というのが無いと思います。それは、あなたが「体験」した町ですので、いちいち自意識のイメージで捉えなおす必要が無いのです。あなたは友人の母親について「イメージ」を持っているかもしれませんが。これまでに聞かされた話などから。けれどもあなたは、自分の母親について「イメージ」なんて持っていません。

イメージというのは自意識の機能なのです。たとえば「イチゴ」という果物の名前を置きます。するとあなたはそれを、写真かイラストのような、イチゴの「映像」に、あなたの中で変換されたかもしれませんが、その映像がまさに「イメージ」です。逆にあなたがイチゴを食べているときに、「イチゴのイメージを持ってください」と言ひましょう。それはあなたにとって「よくわからない」話になるはず。脳がイチゴを「体験」しているとき、イチゴのイメージは要らないし、要らないどころか描くことさえやりにくいからです。

少し専門的な話をするとこうです。作品は「体験」を与えると申し上げました。たとえば、三島由紀夫の

「金閣寺」を読んだとき、想像力のうちに描かれる「金閣寺」というものを、読み手は体験します。こうして想像力に描かれるものは、イメージでもイマジネーションでもなく、イマジネールと言います。イマジネールは想像力であり「体験」なのですが、「イメージ」のほうはただの「空想」です。もっと正確に言えば、自意識に習慣的に染み付いたイメージというものを、むしろ歪形化してゆくときに体験されるのがイマジネールであり、想像力は自意識に染み付いた習慣を洗い直し、本来の精神機構に「体験」を取り戻させる作用を持ちます。幼児にクレパスを渡すと、たいへん芸術的な絵を描くことがよく知られていますね。それは、彼らがまだ、自意識に習慣的なイメージを染み付かせていないので、イマジネールが直接描き出されて、そのまま芸術的な描画となります。ところがある程度の年齢になると、自意識に染み付いた「イメージ」を描画するようになるので、絵は自意識に「わかりやすく」はなるのですが、芸術性を失うのでした。これはごく単純に言えば、幼児は脳でしか絵が描けないのに対し、思春期以降は自意識の「イメージ」を描くようになるということです。

もちろんこの専門的な話を、あなたが隅々まで理解する必要はありません。あなたはただ、イメージは空想であり「自意識の産物」「自意識の習慣の産物」でしかないということだけ、知ってゆかれればよいと思います。イチゴといわれてその映像を思い浮かべる、そのイメージ映像は、実は映像化した「記号」に過ぎず、脳の体験としての滋養を持っていません。一時期、右脳とか左脳とか言われるブームがあり、その中で「イメージ」が礼賛される時期がありました。けれども「イメージ」は陳腐なものであり、人間の脳に雄大な作用など持っていませんから、あなたはこのことを正しく理解されてください。イメージは持っていないほうがむしろよいものです。ただの習慣の思い込みなのでから……あなたは目にする芸能人の全てに「イメージ」を持っていると思いますが、その誰とも親しくありません。我々がメディアや舞台を通して「脳」で出会えるとしたら、芸能人ではなくその彼らが持つ「芸」のほうです。僕だって先のパティ・リッチと親しかったわけではありません。彼の「芸」に出会えたというだけです。

あなたはイメージを持ってはいけません。ましてそれを礼賛するように駆使するなんてもってのほかです。ただし……

ただし、イメージを持つなと言っても、すでに持っているというのが前提です。持っているどころか、もう全てのことについて張り付いてはびこり、深々と根を下ろしているといつてよいでしょう。まずはそうして自分がイメージにすっかり支配されていることに気づくことが必要です。

「現代と恋愛」という話をしてきましたが、「恋愛」といって、そこにイメージを持っていない人などいるのでしょうか。じゃあセックスといつて、あるいは結婚といつて、そこにイメージを持たない人はいるのでしょうか。そんな人は皆無だと言うべきです。恋愛というヒューといい、セックスというキヤーといい、結婚というオメドトウという、イメージのコンクリートに空高くまで固められて、われわれは暮らしているのが実情です。あなたはその恋愛のイメージを追う限り、そこによるこびなど得ることはありません。よろこびがある、ような気がしているのは、さんざんそういうイメージを埋め込まれてきたからに過ぎないのです。あなたはそのイメージを追わず、なるべくイメージから逃れた、直接の「体験」をしてください。

現 代は陶酔の時代だ、ただし……

最後に、奇妙なことを申し上げておきます。こう申し上げることが、正しいかどうか、僕にも自信がありません。

現代は自意識の時代です。これは間違いありません。自意識にはよろこびがないのですから、陶酔式など代替にアテにするのは結局のところ間違いです。ただし……

ただし、現代、つまり、われわれが実際その中に生きているのであれば、それから眼を背けるのも、どこ

か間違っているのでは、と感じます。現代、われわれの空間が事実としてそうなのであれば、ひょっとしたらわれわれは、その陶酔と、陶酔式というのもの、まとめて引き受けていかねばならないかもしれません。つまり、陶酔と、その陶酔式まで、食い散らかしてやると。

そのことまで含めて、自分は誰かと共に、よろこびに到達してみせる、と、そう受けて立たなければ、卑怯なのではないかと、僕はどこかで感じている気がします。まだ僕自身、よくわからないところもあるのですが。

利得を捨てるというならば、よろこびまで一緒に捨てればいい。脳が全体的情報のみを受け取るというのならば、その陶酔式というのもの、よろこびと区別して捉えることはない。そこまでゆかねばきつと、本当のことにはならないのでしょうか。これは講義の趣旨からは逸脱しますので、講義の中ではあえて排除してお話しせずになりました。が、もう最後なので、一応お話ししておきます。このお話しからの先はもう、僕は講義をする側の人間ではありません。講義をする側される側とか、僕とあなたとかいう分化の捉え方も、最終的には自意識の、クソクラエなのだろうなと思っています。まさにもう「講義」ではなくなりますね。僕なりの何かの意地でお話ししたこの部分は、講義としては忘れてしまってください。今役に立つことではこれはない。

お疲れ様でした。これで全ての講義が終了です。

あ
とがき、ということにいたしましょう。

僕は、柄ではないですが、正直に言うと、人が幸福でいるところを見るのが好きです。友人とであれ、恋人とであれ、よろこびの時間を人が過ごされているとき、はっとなり、思わず道を譲りたく感じます。そして出来る限りの時間、それが何者にも侵されることのないようにと、自然に願われてなりません。僕はこうした話の一本についても、ただ僕が僕の趣味のようなものを、淡々と話しているのであって、ここに芝居がかった美的共感をムズムズ起こされる方がいらっしやらないことを願っています。僕はそうして騒がしくなるのが好きではありません。好きではないだけでなく、それは間違っていると感じています。「こんな当たり前のことにガタガタ言うなババア」と言えばよいでしょうか。普段はそういう言い方をしています。言い方がひどいでしょうか。わかりやすいかと思ってですが、本当には、言い方などどうでもよいことです。

僕は自分の声が人の脳に届くことは当然うれしく感じますが、自意識に反応を起こされることには、うれしさを覚えません。もちろん、悪いことだとは思わないですし、なんであれ感激のメールをいただけるようなことがあると、それはありがたく、心あるものとして当然受け取っています。なんであれ、僕が語ろうとするのを、心を傾けて聞き遂げようとしてくれる方がいらっしやったわけですから、それはありがたいことです。

ですが、そこには同時に、一々の焦りもあったのでした。言葉が自意識に回って焼けつきを起こすのは、感動とよろこびではないのに、と。その人の生きていく力の鍛え上げにはなってゆかないのに、と。僕が気を回すのはいかにも大きな世話なのですが、品性の程度はともかく、そういう焦りを覚えます。「そんなひ弱なブルブル感動なんかしてないで、それよりダチに酒でもおごってこい、ありえないぐらい笑わせてこい」とでも言えばよいでしょうか。やはり言い方がひどいという気がします……それでもやはり言い方なんか問題ではない。僕は人が幸福でいるのを見るのが好きです。それも、今回お話しした言い方で言うと、

脳と脳とで、よろこびと鍛えあいをやっている、そうして強くなってゆき、輝くようになっていっている、というところを、見るのが好きです。うらやましくて胸が痛くなるほど好きです。その「好き」というのは、僕自身がお礼や感謝や感激を言われることのうれしさを、正直なところ上回るのです。ですから僕はお礼の声をいただきたいのでは本当はない。幸福です、か、幸福にゆけます、というあたりの、「言い方がひどくても"けっこう"ですので、そちらの音が聞こえたほうが、本当はうれしい。「おっ、こいつ脳がイキはじめてやがるぜ」という、その断片を伺って、つい吹き出してしまうものがある、と、そういうもののほうが好きで、また、そういうもののほうが、正しいのだと感じています。

そして、その正しいもののほうを、現代という時代が、人々から奪ってしまうのだとすれば、それはとても見過ごせないという、気分には、さしあたりなります。現代が人々からそれを奪うというのはシリアスでしょうか？ 僕はこの続きに「ふざけんなくだらん」というひどい言い方を続けます。「なんだその、芝居っ気たっぷりなの、シリアス大好きです、みたいなものは」と。「テメーの脳が壊死してるというだけのことを、拡大して陶酔オナニーの材料にするのかスゲエなお前」と。だって実際にお話したのは、「テメーの脳はポンコツ」という一点張りなのです。ただ、そのようにお話ししては、役に立つかといえば立たないので、精密に順序だててお話ししました。何も見失うようなところや、陶酔に巻き込まれるようなところは無いはずで、自前の脳をポンコツ呼ばわりされて陶酔したらさすがにおかしいです。何か勝手に別のストーリーを作ってやがんな、と……さすがに言い方のひどさが続くので、そろそろ控えましょう。

夏は夜、と言います。まったくだ、と思います。その夏の夜に、美しい少女が、まだ慣れない恋人と幸福そうに歩いている。そこにあるかわいらしい笑顔を見ると、何も問題はない、全てのことは上手くいっている、という気がしてきます。僕自身、瞬間的に、そう思ってしまう。そう信じたがっているのでしょうか。単純に、少女の愛らしさに浮かされてしまっているだけかもしれません。ですが——だからこそ——今回のこの話は徹底して申し上げる必要がありました。「まったく信じがたい」ことに、そうして幸福に愛らしく見える少女が、そのままではまずいほうへ引き込まれていくということなのです。いや正確には、もう十分に引き込まれはじめています。そのことはまったく見つけづらい。思春期というのは、誰が考えたって、陶酔とよろこびが混在していることこそが、むしろ健全な状態です。それは誰も手出しできない、青春の特権です。ですがそれは同時に、ある切なさを受け止め、今後の準備をしていく期間でもありました。つまり、本来は、僕が講義などしなくても、その時期に誰もが知っていくことだった。「自意識じゃだめなんだ」「これは陶酔でしかないんだ」と、誰もが体験で知っていたのです。今、この準備期間が機能しておらず、準備期間を経たはずが、出てきたら、むしろ自意識と陶酔のほうに偏りが増している、という状態になっている。「あんなに愛らしかった少女が」というような感想を、僕は決して持ちたくありません。それで、時代が変質して抜け落ちてしまったところを、僕が一方的にお話しするとして、このような形式を採りました。思春期を越えて大人になるはずが、より子供っぽくなって出てきてどうしますか。営みを通じて、脳が強くなり自意識が縮小されるはずが、自意識が膨張して脳が弱くなる、と、そうして出てきてしまっただうしますか。

美しい少女も、少女ですから、ときにはよろこびで涙を流し、ときには自意識の焼けつきで涙を流すでしょう。それが、やがて美しい女になり、自意識の焼けつきで流す涙のほうは浄化されてしまった、ますます美しい涙ばかり流す女になった、と、そうなったとき、誰に何の異存があるのでしょうか。その誰も異存の無い中、彼女がなんでもなく呼吸だけしている、その呼吸だけでももう恋あいです。そういった厳然たる当然のところから、現代は遠く離れすぎてきました。

では、そんなわけで、長い話に付き合ってください、ありがとうございました。脳と脳とで……というのは、楽しいことです。よろこび、と、言わなくても、勝手によろこびがあります。この講義集を、何度か繰り返し読んでみる、あるいはいくつかの箇所をメモにピックアップするにしても、それにしてもまた繰り返して通して読んでみるということは、あなたにとって損にはなりません。そのようになるだけ、実は慎重に書き進めて参りました。あなたはどうぞ忘れず。読んだことを忘れるのは人間の常です。忘れてよいのですが、それは脳とよろこびの実際が手に入ってからにしてください。僕自身きっと、自分でしたこの「講

義」を、また自分のために読み返すときが来るのだろうか、それもけっこう必死でな、と、予感しています。
それではごきげんよう。

2013年7月19日

九折 空也